
ダイの大冒険でよろず屋を営んでいます

トッシー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ダイの大冒険でようす屋を嘗んでいます

【Zコード】

Z2165Z

【作者名】

トッキー

【あらすじ】

ひよんな事からダイの大冒険の世界にトリップしたオリ主。能力は採取と鍊金釜による合成だけ。はたしてオリ主は最終装備、旅人の服な勇者パーティーの助けになれるだろうか？

本日のFFF商品『万能薬』（前書き）

ダイの大冒険つてラストでも武器以外はショボイですね。

なにせ装備を新調した途端、強敵との戦いで壊れたり敗れたり燃えたりして無くなっちゃいますから（笑）

しかしどラクエとしてそれはイカンとオリ主と共に一念発起！

ほのぼのとマジタリとよろず屋をやつてこいつだと思います。

本日の三品商品『万能薬』

俺の名前はタケルです。

ひょんな事から異世界に来てしまったトリッパーです。
テンプレよろしくで特殊な能力、持っています。
最強じゃないけど…。

「こりつしゃい、こりよみなむ屋だよ」

俺の前には様々な道具が並べられている。

当然これらは商品であり、俺の飯のタネだ。

勿論そんじょそこらの店とは格の違う商品を取り扱っている。
その自信と自負がある。

本日の商品は

特やくそう（HP90ほど回復）	100G
月のめぐみ（HP90ほど回復、麻痺を回復）	210G
万能薬（HP90ほど回復、毒、麻痺を回復）	360G
賢者の聖水（MP90ほど回復）	1240G
毒針（偶に一撃で敵を葬る）	980G
命の指輪（歩く度にHP回復）	2500G
祈りの指輪（使うとMP回復。但し壊れることがある）	2800G

それぞれ20個用意してある。

値段が高い？

いやいや適正価格ですよ。
けつしてボッタクリではないです。

第一、本来ならこの世界には絶対に存在しない一品ばかり。
このへりこの値段にしてもバチは当たりません。

「これは興味深いですね～」

おつと、自分の世界にトリップしてる場合じゃない。
お客様なんだ。お客様は神様です！

俺は満面の笑顔を向けて言った。

「いらっしゃいませー」

「こんにちは、

この店は素晴らしいですね。とても露店とは思えないですよ」

そこにいたのは男二人組の旅人だつた。

成人した男性と、まだ幼さの残る顔立ちをした少年。

男性の方は、優しげな顔立ちをしており、掛けたメガネが更にその表情を際立たせていた。紫色の髪を左右にカールさせていて貴族っぽい。

腰には剣を挿している。戦士だろうか？

少年の方は黒い髪にバンダナを巻いており、腰にはロッドを挿している。

魔法使いか僧侶のようだ。

(どこかで見た事ある二人組だな、どこだっけ?)

俺は一人を観察した。

お金を持っているようにはとてもじゃないが見えない。

この一人がどこの誰かは別にしてもコチトラ商売だ。

俺はジト目で一人組を見た。

男は興味深そうに並べている商品を一つ一つ手にとつて眺めている。

「先生へ、いつまで見てんですか～。もう行きましたよ～」

「ちょっと待ってください、ポップ。もう少しだけですから
「ん？」

センセイ？ポップ？

まだ。この一人、何か引っかかる。
何だけ？

「大体、何ですかこの値段！」

「薬草が100Gー？ぼつたくりもいこりがりますよー。」

ム力！

何だとー！」の野郎！

それは聞き捨てならねえな！

「おい、お密さんー。ぼつたくりとは聞き捨てならないな！

ソイツは唯の薬草なんかじゃないんだよー。

「この俺が心血注いで調合した特やくやうだー。ケチつけんなー。」

「な、なんだとー！」

「こんな怪しい薬草がなんだってんだー？」

「普通の薬草とどう違つてんだー？」

「聞いて驚け！」

その薬草は普通の薬草の約3倍の効果があるんだ！

ベホイミ以上なんだぞ！」

「だったら普通の薬草を3つ買つたほうがお得だろ？が！」

「そりゃ安全が確保できればだろ？が！」

非常時にチマチマと薬草で何度も

回復してゐる暇があると想つてんのかー？」

「何イー？」

「この特やくそいつはな、即効性なんだ！」

回復魔法並なんだよーだから買えー！」

むしり安いへりだーだから買えー！」

「ふ、巫山戯んなー…じかへ紛れて何いつてんだー…誰が

「特やくそいつのめぐみ、そして万能薬をそれぞれ一つお願いします

「せ、先生つー？」

ほつ、この先生は物の価値が分かっているよつだな。
俺は最高の営業スマイルを浮かべて声を上げた。

「毎度ありがとうございます。1340Gになります」

「これでいいですか」

「はい、1340Gありがとうございます。またのじ利用をお待ちして
おります!」

俺は受け取ったお金をしまい込むと、お客様に向かつて深々と頭を
下げた。

「ところで」

お客様さんはお買取った道具を袋に入れながら聞いてきた。

「あなたは一人で商売を?」

「ええ。まあ」

「まだ若いのに大したものですね」

何だこの人。

男性は屈託の無い笑顔を向けて感心する。

そこに悪意は全く無い事が感じられる。

その笑顔に俺は思わず目を逸らしてしまつ。

「……えつと」

「ああ、すいませんね。先程、『自分で薬草を調合したと言つていたので」

つい興味が出てしまつたのですよ。

男性はそう言つた。

俺を褒めているのが気に入らないのだろう。

少年の方は面白くなさそうにしている。

「先生、もう行こうぜ~」

「はいはい、分かっていますよ。それじ私達はこれで」

「はい、またどうぞ~」

心に引っかかりを残したまま、俺は一人を見送つた。

ギルドメイン大陸。

この世界の中心に位置する最大の大陸だ。

1年前、俺はこの大陸最大の国、ベンガーナ王国の郊外にある小さな村で目を覚ました。

混乱して、嘆いて、絶望して、そんな俺を村の人々は優しく受け入れてくれた。

この世界の常識を学んでいく内に俺は自分の置かれた状況を受け入れ納得した。

納得できた一番の理由はやはり魔法と魔物の存在だった。

村の外で見かけたプルプルと震えるゼリー状の魔物を見た時、俺は

思いつきり肩を落として言った。

「ドラクエかよ」

そう、この世界はドラゴンクエストの世界だったのだ。ドラゴンクエストシリーズの中のどれかは分からぬもしかすると完全にオリジナルかもしれない。しかしどラクエと分かつた時、俺の中にあつた絶望は完全に消えた。絶望は希望へと変わったのだ。

だってドラクエだよ？

しかも村の人の話では魔王は既に勇者によつて倒されて平和な世界。村の外でスライムに襲われなかつた理由も頷ける。命の危険もなく、この世界を堪能できるということだ。もしかすると魔法を覚えることが出来るかもしねり。となると俺のステータスつてどれくらいだろう？

その時だった。

俺の脳裏に自分の『つよさ』が浮かんだのだ。

「うわっ、極端なステータス。しかもオレつて弱つ！」

浮かんだステータスは次の通りだつた。

タケル

レベル：1

最大HP：20

最大MP：500

ちから：10

すばやさ：10

たいりょく：10

かしこさ：256

うんのよさ：256

EXP：0

攻撃力：10

防御力：7

どうぐ

E・普段着

呪文・特技

錬金釜

採取

大声

口笛

寝る

俺は自分の能力値よりも特技に注目した。

錬金釜？採取？

何それ、どうやって使うんだ？

気がつくとカーソルを合わせて採取を選んでいた。

採取を行いますか？

? はい
いいえ

選択すると、目の前に光るもののが。

光っているものに手を伸ばすと。

太陽石を2個手に入れた

気がつくと俺の掌の中にはほんやりと光を放つ石が一つ、しつかりと握られていた。

実際にこの商売を初めて1年になる。

この世界で得た俺の能力。

採取と鍊金釜。

採取は割と何処でも利用できる。

その辺で適当に使えばレミラーマよろしく辺りが光るのだ。
光に触れると、素材が手に入る。

俺は自分の能力は最大限に利用した。

そうでなければ生きていいくことなんて出来なかつたからだ。
はつきり言って俺に戦闘力はない。

だがそれでも俺の能力はチートといつても良い。

何で自分にこんな能力があるのか分からぬが、考えたところで答
えなど出る筈がない。

「都合主義」ということで、とっくの昔に諦めた。

この世界に来て1年。

魔物が普通に存在する異世界で、俺はほのぼのと、旅のよろず屋を
営んでいる。

勿論平和な今の時代でなければ旅など出来ない。

俺の特殊なよろず屋は様々な場所を旅しないと成り立たないので。
なにせ鍊金には素材が必要。

そして優れた素材を得るには採取が必要不可欠だからだ。
普通の店で売っているものでは優れた物は作れない。
だからどうしても旅を続ける必要がある。

「ああ、平和つて最高つ！」

俺は岩場で採取を行いながら悦に浸つていた。
岩場で適当に採取しているだけで、質の良い鉄鉱石やミスリルが手
に入るのだ。

これだからこの商売は止められない。

「…やつぱりやめようかな～この商売」

「ぐるぐるぐる

採取もキリの良いところで切り上げ、街に戻ろうとした矢先だった。
リカントが俺の前に立ちふさがった。

ヨダレをだらだらと垂らしながら、血走った視線を俺に向けてくる。
あれ？ 平和なドラクエ世界は？

本日の田舎商品『万能薬』（後書き）

オリ主はようす屋としてダイの大冒険の世界では絶対に手に入らない回復アイテムや武具を売りさばいていこうと思います。多分、お金足りなくて買えないことは無いと思います。レオナ姫がいるから…。

本日の田中商品『光のアドレス』（前書き）

行商を続けるオリ主。

一体何時になつたらダイの大冒険の世界と繋げられてやが...

本日の目玉商品『光のドレス』

「うわ、ここち来んな！」

リカントの叫び声と同時に俺は背を向けてダッシュ。
当然逃げる。

なにせ俺には戦闘力はない

卷之三

戦つて勝てる相手じゃない。

俺は全速力でひたすら走る。

しがしこは在場

「い、いつの間に！？」

田の前の坂陰からリカントが飛び出した。
どうやら回りこまれてしまったようだ。
俺は急ブレーキをかけて立ち止まる。

不味い。
本当に不味い。

実験結果無しの値は0.1%で計算した。

「……」

それでも生き残るために、俺は手持ちの道具を確認する。

鍊金したばかりの取つて置きの武器。

武器操る事は出来ないが、武具に宿つた力を使うくらいなら。

「俺にも出来る！」

俺は道具袋から一振りの長剣を取り出して叫んだ。

「氷結ツ！」

俺の声に反応して吹雪の剣の刀身が輝く。

ビュ
オオオオオオオツ
！
！
！

解き放たれた力はうねりを上げて吹雪へと変わりリカントを包み込んだ。

マヒヤードと同格、絶対零度の銀世界が一瞬にして目の前に広がった。
俺を襲つたりカントは……。

「ご愁傷様です」

リカントは氷の檻の中で息絶えていた。
完全にオーバーキルですね。

「あーあ、これじゃあ暫く採取は無理か」

氷に閉ざされた岩場を見渡して俺は溜息を付いた。

「そういうえばどうしてリカントが襲ってきたんだろう？」

確かに勇者が魔王を倒して魔物は邪悪な意志から解放されてる筈

それなのに……っ！？」

ギャアー！ギャアー！ギャアー！

ま、魔物の声！？

遙か遠い山向こうから魔物と思わしき声が聞こえてくる。

俺は思わず身を竦ませた。

じょ、冗談じやないぞ！

もしまだ魔物に襲われでもしたら！？

高価な装備があるからって安心など出来るわけがない！

第一、もし不意打ちでも受けければ間違いなく死ねる。

街までかなりの距離がある。

もし道中襲われたら！？

「……ん？ そうだ、何ですぐに気が付かないだ俺のアホ！」

さつきはリカントの所為で気が動転してたんだな。

命が掛かっていたのに。

俺は道具袋からキメラの翼を取り出すと空に向かって放り投げた。

パラララタッタタ

空高く舞い上がりながら、俺は確かにファンファーレの様な音楽を聞いていた。

もしかしてレベルアップ？

現在オレはベンガーナに来ていた。

リカントを倒した俺は旅支度を整えると、直ぐにベンガーナに旅立つた。

行商人の利用する比較的な安全な街道。

俺は聖水を惜しむこと無く利用、そしてレベルアップすることで新たに習得した特技『忍び足』を使いながら旅をする事で魔物を避けながらベンガーナに到着することが出来た。

もちろん道中、採取を行うことを忘れなかつた。

どうやら商人魂が染み付いてしまつたようだ。
ベンガーナに辿り着いた俺は、さつそく商売を始める為に適当な場所を探す。

行商人である俺にとって露店を開く場所の確保は最優先事項だ。

「……お?」

露店を開く場所を探して歩くこと約1時間。

比較的に人通りの多い広場に辿り着いた。

俺と同じように露店を開いている行商人が何人かいるので偵察として取り扱っている商品を覗いてみる。

よし勝つた。まあ当然だな

俺はほくそ笑むと、広場の一角を陣取り露店を開いた。

今日お俺は武具屋さん！

そして本日の商品はコレだ！

玉鋼の剣：4200G

隼の剣：5000G

玉鋼の盾：1400G

魔法の盾：2000G

精霊の盾：3000G

鉄仮面：2100G

玉鋼の兜：4000G

玉鋼の鎧：4800G

魔法の鎧：5800G

精霊の鎧：7000G

さつき鍊金したばかりの出来立てホヤホヤだ。
並べてある殆どの商品がどの店にも取り扱っていない物ばかり！
次から次へと並べられていく見た事もない武具。
通行人達は次々と足を止めて興味深そうに見ている。
何せ商品と袋の大きさが一致しないのだ。
見た目どこにでもある布袋から次々と剣や鎧が飛び出していくのだ。
そりや驚くわな。

このチートな道具袋は気がつけば持っていた俺の財産だ。
こいつのお陰で俺は幾らでも持ち運びが出来る。
商人にとって、コレほど素晴らしい物は無いだろ？

「へえ、こりゃ凄い！見たこともないものばかりだ！」

おつと、お姫さんがあ呼びだ。

俺は満面の営業スマイルで声を上げた。

「いらっしゃいませーーー！」

通行人を搔き分けて俺の前に陣取った客は4人。
如何にもな格好の冒険者達だ。

ドラクエ？の典型的なパーティーだった。

見た目が男勇者に始まり戦士に魔法使い、そして僧侶。
しかし何処か頼りない。

てこいつが俗物丸出しだ。表情が…。

「おこ見のよ、おれつまーー」の盾すばたえー。」

「ふむ、魔法の盾か。」の軽ひなひコシも使えやつじやな

「でも仰々しい装備しか置いてなこのが。ローブやドレスは無こいの
？」

「わう言つなよ、ずるぼん。確かに品揃えは悪いが置いてある装備
は一級品だ」

「やひりん…」

「何こいつ…。」

それに品揃えが悪い！？

言つてくれるじやないか！

露店のスペースじゃ並べられる商品の数にも限りがある。
ドレスやローブだと？

そこまで言つなんぢやせひりんじやないか！

「おれわざ、ローブやドレスを」所望ですか？」

「ええ、置いてないの？」

「勿論有りますよー取つて置きの一品がね

「なんですかーならわれを出してみなせこよー。」

「しかし、かなつの一品ですのでお値段張りますよ。

お密さん大丈夫ですかー？」

「勿論よー。お金ならこへりでも出すわよー。」

「お、おーーすみませんー。」

仲間たちが慌てだす。

どうやら浪費癖のある僧侶さんの様だ！

いい力モだ。せいぜい吹っ掛けでやるとするか。

俺は金色に輝くドレスを取り出した。

お密さんの眼の色が変わる。

「じゅうは光のドレスです

どうですか？

俺は今ドヤ顔に違いない。

ドレスのあまりの輝きに目を奪われている密。

メチャクチャ気分良い————つ！！

「素敵……」

僧侶のお姉さんはウットリとした表情で光のドレスを眺めていた。
もう夢中だ。後一押しで墮ちるな。

「どうですか？お密さんじゅうタリですよ？

残念ですが今お密さんが見つけている服、

それでは貴方の美貌が損なわれるところなのです

「や、そつかしり？」

「僧侶の人は照れたように頬を搔く。
「」」」」一気に置み掛ける！

「素晴らしいレスは素晴らしい貴方に」」」」相応しく！

「どうですか？本来なら2万5千ゴールドですが、

今なら何と、たったの2万ゴールド！」

「ええっ！？」5千ゴールドも安くなるの！？」

「はい、是非お姫さんに着ていただきたく…」

「買ひ…買ひわ…」

「す、するほん…」

「やめんか！」

「ああん！？」

「何でもないです、はい」

止めようとする仲間を一睨みで黙らせた僧侶さん。
彼女は即金で俺に2万ゴールドを支払った。

おお、リッチだ。冒険者って儲かるんだな。

「まいどありがとうございました」

俺は勇者一行を笑顔で見送った。

それにも、冒険者って凄いな。

ゲームみたいに魔物を倒してもGは手に入らない。

残るのはやはり魔物の死体だけだ。

この世界の冒険者は依頼を受けて商人を護衛したり、捜し物をしたりと何でも屋の様な事をして報酬を得ている。

魔物を倒してGを落とすなら賄やつてるだろ？

「あの、コレを下さい」

おっと、自分の世界に浸っている場合じゃない。

「いらっしゃいませ！」

光のドレスを皮切りに、商品は次々と売れていく。

他では手に入らない珍しい品の数々。

俺は他の商人の嫉妬を受けながら、笑顔で商売を続けるのだった。

本日のタケルのステータス

タケル

性別：おとこ

職業：鍊金術師

レベル：3

さいだいHP：28

さいだいMP：508

ちから : 14

すばやさ : 12

たいりょく : 15

かしこさ : 256

うんのよさ : 256

攻撃力 : 54

防御力 : 63

どうぐ

E : 雷帝の杖

E : ビロードマント

E : 力の盾・改

E : 幸せの帽子

E : スーパーリング

呪文・特技

錬金釜

採取

口笛

寝る

忍び足

大声

本日の田中商品『光のドレス』（後書き）

リカントを倒してレベルアップしたオリ主です。
魔法は契約しないと覚えないのとまだ先です。

本田の田中商店『吹雪の鏡』（前書き）

装備はドリフト・コースの良さに取りです。
「」を承下せ。

本日の田玉商品『吹雪の剣』

「是非その剣を売つて欲しい！」の通りだ！」

現在、俺の目の前で美男子が頭を下げる懇願している。

ここはリングガイア王国。

世界でも1、2位を争う程の軍事国家で城塞王国として有名だ。突然凶暴になり始めた魔物たち、巷では魔王が復活したのではないかという噂が実しやかに囁かれていた。

俺はこの国ならば、そう易々と魔物達の侵攻に遅れは取らないだろうとリングガイアにやつてきた。

道中、何度も魔物に襲われもしたが、チート装備の特殊な力でどうにか撃退。

リングガイアへ辿り着いた俺は、いつも通りに露天を開いた。本日の商品はコレだ！

特やくそつ（HP90回復）100G

超万能薬（HP90～120回復・眠り、麻痺、毒、猛毒、混乱回復）300G

世界樹の露（パーティのHPを完全回復）3000G

世界樹の葉（死者蘇生）10000G

エルフの飲み薬（MP完全回復）3000G

爆弾石（イオラの効果）170G

砂塵の槍（マヌーサの効果）6600G

ムーンアックス（攻撃した相手を混乱させる）8800G

ウイングエッジ：9000G

普通のチーズ：10G

辛口チーズ：15G

おいしいミルク：5G

高価な物ばかり取り揃えると全く売れない日もあるので普通の密にも手が届く値段の商品も並べておく。ドラクエ?のチーズだ。

戦いの役には立たないが需要はある。

俺は吹雪の剣を自分の側に置く。最近かなり物騒だからだ。強引に商品を持って行こうとしたりする者。

そして難癖つけて営業妨害をする奴が出てきたのだ。今回も…。

「テメエ…舐めてんのか!」

「そりだ!足下見やがて!こんな値段ありえねえ!」

「いいえ、適正価格です

俺は文句を付けてきた二人組の男にピシヤリと言い放った。男たちは顔を真っ赤にして睨みつけている。

「買つ気がないのなら、遠慮ください。

他のお客様のご迷惑になりますから」

「な、何だと…?」

「俺達は密だぞつ…?」

「お客様、値切りの交渉ないば当然の事、

しかし度が過ぎれば唯の営業妨害です。お引取りを」

「こ、この糞ガキがあつ！」

男達は腰に差していた短刀を抜き放つた。

唐けかに悲鳴が上がった

ヤレヤレ、最近はこうして客が多くて困る
俺は側に置いてある吹雪の剣に手を掛け、そして

吹雪の剣に込められた力を放つと同時に、
唯ひが削り入る音が止まらなくなつた。

「あ

割り込んできた誰かは男一人組と共に吹雪と突風に巻き込まれ吹き飛ばされる。

リガントを一瞬で凍りつけにする吹雪の剣。

本来ならマヒヤト級の威力を出せるが、手加減して放つ事が可能だ。
そうでなければ辺り一帯が銀世界になつてゐる。

そんな事よりも

「大丈夫かな？」

「…………うくくつ…………だ、大丈夫だ」

巻き込まれたのは青年のようだ。

蒼銀の髪の凜々しい顔立ちの美青年。

青年は服についた氷や霜を払いながら立ち上がった。

「す、すいません。大丈夫でしたか！？」

「ああ、平氣だ。それよりも君は凄いな。

商人でありますながら、あれほど高度な呪文を使つとは

「いや、さつきのは呪文じゃなくですね」

俺は吹雪の剣を見せて言った。

「「」の剣の力なんですよ」

俺が吹雪の剣を見せると青年は目を見開いて驚いた。

「な、それじゃあその剣は伝説の武具なのか！？」

伝説の武具？

何言つてんだこの人。

別に勇者以外でも装備出来るぞ。俺も出来るし。

「いえ、伝説の武具じゃなくて俺が作った」

「なんだつて！？これほどの剣を君が！？」

青年は吹雪の剣を手にとつて刀身を覗き込む。まるで剣に魅入られたように夢中になつてゐる。

「……吹雪の剣といいます」

「吹雪の剣……、北の勇者たるボクに相応しい……っ！」

北の勇者？

どつかで聞いたよつた。どじだつけ？
それにしても勇者を名乗るとは……。
前のお客さんは格好が？の勇者だつたし。
流行つてんのかな？

「頼む！」

青年がいきなり大声を上げた。

「どつかこの剣を売つてくれ！」

ナルホド、吹雪の剣が欲しくなつたわけですか。
確かに欲しくなるのも頷ける。

何せ俺でさえ愛用している一品だからね。
しかもドラクエ？の吹雪の剣。

なんと攻撃力105！

戦闘中使用するとマヒヤドの効果！

最後まで愛用できる最高クラスの攻撃力の剣ですよ。
どうしようかな？

それ、売り物じゃないんだよね。
何せ俺の護身用として鍊金した剣だし……。

「お客様、それは売り物ではございません。

「チラの剣は如何でしょつ？お客様にピッタリですよ？」

俺は玉鋼の剣を取り出すと、青年に差し出した。

「違う！」

青年は腕を振つて叫んだ。

「ボクは、ボクに必要な剣は、その吹雪の剣だけだ！」

「どうかこの通りだ！その剣をボクに売つて欲しい！」

ついには青年は頭を下げて頼み始めた。

それを見た他の客や通行人がヒソヒソとし始める。

「ノヴァ様があんなにしてまで頼んでるのに」

「ひどい！ノヴァ様が可哀想！」

「大体、あんな冴えない奴があれほどの剣なんて似合わねーだろ？」

「宝の持ち腐れだな」

どうやら青年はこの国では有名人であり人気者のようだ。
それ以上に俺のライフは今にもゼロになりそうだよー。
こんちくしょう！わかつたよ！売ればいいんだろ！
ククク……、売つてやるよ！買えるものならな！

「わ、分かりました。お客様の熱意に負けました」

「ほ、本当か！？あ、ありがとー！」

俺の言葉に青年の表情はパアつと明るくなつた。

俺の手をとつてブンブンと上下に振つて礼を言つてこる。
どんだけ気に入つたんだよ吹雪の剣。

「吹雪の剣、60000Gになります！」

ピシリッ！

周りが凍りついた。

吹雪の剣を実際に使つたみたいに。
そしてまた周りがヒソヒソと話し始める。

「聞きました？ 60000Gですって！」

「わざわざ一人組の言ひ通りだわ。完全に足下見てますよ」

「ノヴァ様は勇者だぞ！ もつとまかろー！」

「やうだ！ そうだ！」

「やめないか！ みんな！」

ノヴァは周囲を一蹴して口チラへと向き直り頭を下げた。

「すまない、街の皆が失礼をした。

代金は城のものに預けさせぬ。剣は使いの者に渡してほしい

「は、はい。毎度ありがとうございます……」

か、買うのか？ マジで？

60000Gだぞ！ どんだけ金持ちなんだよ！ ？

「ゴールドは魔物から生まれる世界じゃないんだぞ！？
超大金なんだぞ！？」

「ノ、ノヴァさま、よろしいのですか？将軍が何と言つが…」

兵士が二人、ノヴァに詰め寄つている。
今まで気が付かなかつた。護衛の人かな？

「し、心配ないさ。これも正義のため。

「パパも…いや、父上も分かつてくれるわ」

将軍だつて？

良い所の坊ちゃんどこのじやない！

本物のセレブかい！？

「『』の吹雪の剣は『氷結』の号令でその力を發揮します。

使用の際はくれぐれもご注意下さい」

「わかつた。『氷結』だな。覚えておこう」

ノヴァ様が去つて約1時間後、城の使いが来た。

そして確かに60000Gを支払い、吹雪の剣を購入していった。
将軍家パネエ…。

「店じまいするか…」

護身用に片手間で作つた吹雪の剣。
まさか60000Gに変わるとは…。

60000Gは冗談だつたんだけどなあ。

ヤバイ！ニヤニヤが止まらない。

こうなつたら吹雪の剣、また鍊金しても良いかもしねない。

材料に余裕はあるしな。

いや、そんな事よりも重要な事実に今気づいた。

もつと早くに気づけよ俺のアホ！

「ダイの大冒険か…」

主要人物に有つてんじやん。

アバンとポップ組じやなくて北の勇者で気づくとは…。

まあ、イイ買い物していつたからな。

やつぱりお客様は神様だな。

という事はどれだけレベルが上がつても魔法は覚えないだろつな。
確かにこの世界は特殊な呪文を除き、契約しないと魔法は習得出来ない筈。

俺のMPつて有り余つてんだよな

自衛のためにも是非とも呪文書がほしい！探してみるか！
さて、今後の方針も決まつたことだし今夜はパーティーと楽しむかな。
パ、パフパフとか…。

本日のタケルのステータス

タケル

性別：おとこ

職業：鍊金術師

レベル：6

さいだいHP：37
さいだいMP：515

ちから：20

すばやさ：16

たいりょく：20

かしこさ：256

うんのよさ：256

攻撃力：60

防御力：65

どひぐ

E：雷帝の杖

E：ビロードマント

E：力の盾・改

E：幸せの帽子

E：スーパーリング

呪文・特技

鍊金釜 採取 大声 口笛

寝る 忍び足 穴掘り

本田の田中商品『吹雪の剣』（後書き）

確か身の守りって無いですよね。
身の守り = 素早さだったっけ？

本田の画集『ロトの歌』（繪畫也）

ロン・ベルクさん臨場です。
王者の剣を見たロン・ベルクさん、どんな反応するんだね？
妄想しながら執筆しました。

本日の田玉商品『ロトの剣』

鎌びついた剣に磨き砂、オリハルコンを加えるとアラ不思議！

「王者の剣の出来上がり～」

この世界はオリハルコンの鉱脈がある。

といつても俺の採取スキルで偶然見つけた物だ。

実際に俺以外の人間にオリハルコンを採取することは出来無い。

一応チートスキルだし。

しかし実際にオリハルコンを手に入れた時、俺は狂喜乱舞したね。

鎌びついた剣なんて、その辺の剣を塩水に付けて鎌びさせただけだし、磨き砂なんて砂場で採取すれば普通に手に入る。

まさか本当に王者の剣が出来るとは思わなかつた。

最強装備じやねーか！？

「むむむ…、マジでどうしよう？」

「この王者の剣、攻撃力は？で使える？」と同じバギクロス

ダイの大冒険の世界だとクロコダインの斧でも充分無双。
ちょっとしたアバンストラッショ気分らしい。

それを振り回すだけで極大呪文連発出来る王者の剣…。

俺、魔王軍に目を付けられたりしないよな？

俺は王者の剣をスキルで見た。

王者の剣、攻撃力158。

戦闘中使用すると、バギクロスの効果を發揮する。

コレを装備できるのは勇者、戦士、賢者だろ？ついでに俺。

「どうするかなー」

俺はいつもの様に露店の準備をしながら溜息を付いた。

ここは森に囲まれたノドカな村、ランカーカス。

未来の大魔導師ポップの生まれ故郷だ。

この世界がダイの大冒険だと気づいた俺は、店を置むとリングガイアを出した。

何故ならあの国は近い内に超竜軍団に滅ぼされてしまうからだ。

俺はリングガイアを出る前に呪文書を購入した

初級の呪文しかなかつたが今はこれで十分だろう。

契約できたのはヒヤド系呪文とバギ系呪文、そしてホイミ系呪文だ。これらの呪文を熟練することで更に上の中級、上級呪文を習得できる。

つまり要練習だ。

この世界は魔法力をコントロールする術があるので実際に呪文を使うとなると結構難しい。俺は中一病よろしくの妄想力のお陰で呪文自体は直ぐに使えた。

だがポップやマトリフのように魔法力を放送出する芸当はまだ出来なかつた。

ルーラやトブルーラ使いたかつたなあ。

ていうか是非使いたい！主に逃げるために！

「…………おい、…………おい！」

ん？誰かが呼んでいるような？

「おい！聞いているのかー！」

「は、はー！」

気がつくと俺の田の前には強面の顔色の悪い男がいた。
いや顔色が悪いなんてもんじゃない！紫色じゃねーか！
男は自分の容姿を覆い隠すようにローブに身を包んでいた。
男の視線はは王者の剣に釘付け。

身を乗り出して剣に手を掛けようとする。

その拍子にスルリと頭部を覆っていた布が落ちた。
耳長つ！なにコイツ？

「ダークエルフ？」

「誰がエルフだ、俺は魔族だ」

魔族だと？

そういうえばここはランカーカクス。
ランカーカクスの魔族といえばもしかして…。

俺はまじまじと魔族を自称する男の顔を見た。
顔の中心に？傷、間違いない。伝説の魔剣鍛冶師だ。

「えつと、お客様？」

「そうだ」

「いらっしゃいませ～～～」

俺は最高の営業スマイルで魔剣鍛冶師を迎えた。
俺の対応に魔剣鍛冶師さんは一瞬、田を見開くように驚く。

「どうしました？」

「いや、魔族と名乗つて歓迎されるとは思わなかつた」

「お客様は神様です」

本田の商品はコレだ！

光の剣（使うとギラの効果）4800G

ドラゴンスレイヤー（ドラゴンの鱗を易々と切り裂く）12000G

雷の槍（ディーン系の追加効果）19800G

デーモンスピア（即死効果）34500G

力の盾（使うとベホイミの効果）17000G

水鏡の盾（使うとマホターの効果）30500G

おかしな薬（使うと敵を混乱させる）200G

万能薬（HP90～120回復）360G

鉄鉱石（素材）100G

ミスリル鉱石（素材）1050G

磨き砂（素材）20G

「お客様、何になさいますか？」

「他では手に入らない珍しい物ばかりですよ」

「そ、そ、そ、う、か、……、そ、れ、よ、り、も、」

魔剣鍛冶師殿は王者の剣を指さした。

「い、この剣を見せてもらつても良いか？」

今まで人間の武器なぞ興味は無かつた……だがつ！」

魔剣鍛治師様はにじり寄つて鞘に収められた王者の剣を覗き込んだ。

「えつと、『ご覧になられますか？』

俺が王者の剣を差し出すと、魔剣鍛治師様はそれを引つたくつた。鞘から剣を抜き放ち……、その表情を驚愕に染めた。

「…………！」この剣は……まさか！？

魔剣鍛治師様から滝のように汗が流れ落ちる。

凄いな。どんだけ驚いてんだこの人。

「小僧つーーの剣、一体どうやって手に入れた！？」

「えつと、俺が造りました」

「な、何だとつーー？そ、そんな馬鹿なーー？」

魔剣鍛治師さんはフラフラとその場に崩れ落ちた。
おーい、大丈夫ですかー？

「！」この剣をお前のよつた奴が？

失礼な人だな。

「はい、じぶん鍊金術師なもので」

「鍊金術師だと？」

「はい」

魔剣鍛冶師さんは俺の顔をまじまじと見た。
なんか照れるな。

「小僧、名はなんといつ？」

「えつとタケルです」

「俺はロン・ベルクといつ。」

タケルよ、その剣だが俺に譲ってくれないか？

えつと売つてくれじやなくて譲つてくれ？
そんな事言つ人は初めて見た。

なんか図々しいなこの人。だから俺は笑顔で言つてやつた。

「王者の剣、120000Gになります」

「頼むー」の通りだ！

俺にはどうしてもその剣が必要なんだ！」

知らんがな。客じやないなら帰つてほしい。

ロン・ベルクは魔界でも伝説になるほどの中鍛冶師だ。
そんな男が人間に熱心に接触を図る。
はつきり言つて危なすぎる。魔王に手を付けられるじやないか。

「お密様、他のお密様に迷惑ですねで…」

「…そうだー俺の造つた武具と交換はどうだ？」

120000Gなんて大金は無いが、それに見合つといつ自負はある

一品で足りないなら全て持つて行つても構わん！だから頼むー。」

ナンダト？

ロン・ベルクの作品と交換？

しかも全部でも良いだと？マジでか！？

「で、では実際にその商品を見せていただかないと元には

俺は努めて平静を装いながら言つた。

「交換してくれるのか！？」

ロン・ベルクさん。物凄い嬉しそうだ。

当然か。王者の剣はオリハルコンの剣だ。

しかも武器としては最高クラスの攻撃力。

ロン・ベルクが眼の色えるのも不思議じゃない。

俺は露店を置むと、ロン・ベルクに連れられて森の奥の小屋にやつて來た。

「いいだ

「でも田舎とはいえ魔族のロンさんが

良く平気な顔で人里に来れましたね？」

「ああ、村にはダチがいてな…いやソレよりも入つてくれ

ロンさんに促されるままに俺は小屋に入った。
中を見て溜息が漏れる。

「……うわあ

「どうだ？」二三が俺の鍛冶場だ

ロンさんは得意そうな顔で言った。

辺りを見渡すと、様々な武具が置いてあった。
どれもが不思議な輝きを放っている。魔力なのだろう。
しかし王者の剣と交換しても良いといつ程の品ではない。
ロン・ベルクの武具で欲しいものといえば決まっている。
鎧の～シリーズだ。

あれを数品と交換なら考へても良いと思つたのだ。

「ロンさん、交換の品はありますので全部？」

だつたら先刻の話は無かつたことにしてほしいです

「ま、待て！ 奥に俺の傑作があるーちょっと待つていてくれー！」

待つこと数分。

ロンさんは布に包まれた武具を持って現れた。
見たところ四品。両手で抱えるには限界だろ？
ロンさんは一品を残して地面に置くと、布を外し始めた。
顕になつていく武具。
鈍い銀色が顔を覗かせる。
出てきたのは長弓だった。

不思議な事に弦が見当たらぬ。
弓は装甲の様な物が覆つており、それが弦を隠しているようだ。

「まあ、呪田、こいつは弓の魔装」

「弓の魔装? どうこつたものなんですか?」

「タケル、手にとつて鎧化^{アーマード}と唱えてみろ」

「はー……アーマードー」

弓を覆つていた銀の装甲が剥がれ意思を持つように俺の身体に装着
されていく。
上から鉢金、胸当て、そしてプロテクターに脇当て。
まるで聖騎士のクロスだな。意外に軽い。

「気に入つたようだな」

「でもロンさん、俺に弓の心得はないですよ」

「お前は商人なのだろう?」

ロンさんはニヤリと笑つた。

確かに俺が使える必要はない。でもなんか悔しい。

「次はこつだ」

ロンさんは次の装備の布を外した。

出でたのは銃剣だつた。マジでか!?

「」こつは試作品でな。

全く新しい概念の武具を創りだそうとして「」こつなつた

「鉄砲と剣を合体させたんですか？」

「ああ。名はまだ無い」

「まさにガンブレードですね」

「ん？ ガンブレードか……いいなその名」

「どうやらガンブレードに決定したようだ。」

「でも魔族であるロンさんが鉄砲作るなんて…」

「ああ、人間のように火薬で弾を撃ち出すものじゃない。」

「そいつは魔法を利用した銃だ」

アバン先生の魔弾銃じゃん。

「何を想像しているか知らんが、

ソイツを使うと人間でも魔法剣を使つことが出来るようになる」

なんですよー？」

「撃ち出した攻撃呪文を刀身に付させて擬似的に魔法剣にする

それがこのガンブレードの特性だ。どうだ氣に入つたか？

間違いなく竜の騎士を意識して造つてゐるよ」の人。
どんだけ対抗心燃やしてゐるんだよ！

「素材はミスリル鉱石で出来てゐる。

強度は魔装に劣るが、同じ素材だと魔法剣に出来ないからな」

「どうしてですか？」

「魔装に使われてゐるのはメタル鉱石。

こいつは呪文を受け付けない物質だ。

だからガンブレードには使えなかつた

最後に魔法の弾だ。装弾数は10発。

「イツは魔法の筒の応用で造り出した物で

攻撃魔法を詰めることが出来る」

成る程。

でもダイはヒュンケルの魔剣で魔法剣使つてたよな？
あれは竜の騎士だから出来る芸当つて訳か。

考へてゐる間にロンさんは次の武具の布を解く。

「これは……爪？」

鋭利な鉤爪が付いた手甲だった。
見たところ魔装ではないようだ。

「それは風魔の鉤爪」

「風魔の鉤爪……」

「とりあえず装備してみる」

俺は言われるままにソレを装着してみる。
左右両方とも装着する。

「そいつは切れ味もある」とながら特殊な力もある。

良いか？外に向けてだぞ？何かを斬るように振つてみる

「……シッ！」

爪から真空の刃が放たれて森の木を薙ぎ倒した。

「二、これは…」

「物騒だからあまり振り回れないほうが良いでや」

確かにその通りだ。

他の伝説の武具と違つて号令が必要ない。

雷鳴の剣の様な攻撃魔法の追加攻撃。

それでもかなり強力だ。

「それで最後の武具は？」

俺は風魔の爪を外すとロンさんを促した。
ロンさんは頷くと、最後の武具の布を外した。

「柄だけの剣……？」

「魔闘剣だ」

首を傾げる俺にロンさんは説明を始めた。

「ソイツは持ち主の魔法力、もしくは闘気を刃に変える剣だ

昔、最高の杖を造る際、試作的に造り出した物だが……。

鍛冶師として外に出したくなかったが……」

「これも王者の剣を手に入れる為だ。

ロンさんは不機嫌そうに呟いた。

「そうか光魔の杖の……、ロンさん嫌つてたっけ。

「魔闘剣か……俺の場合は魔法力だな」

魔闘剣は俺の魔法力に反応し光の刃を創り出した。

俺の身長以上の刀身の長さにロンさんは目を剥いた。

「大した魔力の持ち主のようだな

「……ロンさん」

「何だ？」

「王者の剣、ロンさんに譲るよ」

「ほ、本当か！？」

「はい、ロンさんの造った武具、大変気に入りました」

「商談成立だな」

俺達は互いに握手をすると視線を合わせて口元を釣り上げた。王者の剣はまた鍊金すれば良いだけのことだ。しかし魔界最高の鍛冶師の作品は絶対に手に入らない。ランカーカスに来て本当に良かった！

「気が向いたら何時でも来い。お前ならば歓迎しよう」

「はい、今日はありがとうございました」

「……タケル、お前の王者の剣を上回る剣を創りだしてみせる」

ロンさんの目に強い決意の炎が宿っていた。

「それではまた」

俺はロンさんに別れを告げると、ランカーカスから旅立った。

今日のタケルのステータス

タケル

性別：おとこ

職業：鍊金術師

レベル：6

さいだいHP：37

さいだいMP：515

ちから：20

すばやさ：16

たいりょく：20

かしこさ：256

うんのよさ：256

攻撃力：98

防御力：65

どうぐ

E：ガンブレード

E：ビロードマント

E：力の盾・改

E：幸せの帽子

E：スーパーリング

E：魔法の弾×10

呪文・特技

鍊金釜 採取 大声 口笛
寝る 忍び足 穴掘り

ホイミ
ヒヤド ヒヤダルコ
バギ バギマ

本日の販売商品『ロードの剣』（後書き）

オリジナル装備……。

なんか恥ずかしくなつてきた。

これつて中一なんでしょうか……？

FFパクリとか言わないで下さい。

人間でも魔法剣が使える使用になつておりますです。

魔法は呪文書を手に入れる事で覚えました。

本日の田玉商品『大賢者の杖』（前書き）

そろそろダイ達と出会いたいなあ……。

本日の田玉商品『大賢者の杖』

現在オレはパプニカ王国に来ていた。

この国はミスリル銀の道具や特殊な魔法の布で織られた衣服が特に有名で、一人の商人として凄く樂しみだ。

おまけにこの辺りには脅威となりそうな魔物は殆どいない。

魔王軍の侵攻の魔手もまだ伸びていないからだろう。

この国が滅びる前に貴重な物を仕入れておこう。

俺はパプニカ王国で最も活気のある商店街に足を踏み入れた。

人々が賑わい商人は自慢の品を売ろうと躍起になつて呼び込みをしている。

俺は露店で売られている鳥の肉を購入してかぶり付きながら街を歩いた。

さあ魔法の布を手に入れよう！

「ふう、漸く手に入れることが出来たぞ」

街を歩くこと数時間。

目当ての布を手に入れた俺は、広場にあるベンチに腰を下ろした。パプニカ特産の魔法の布。

高い対魔力を持ち普通の布よりも遥かに丈夫に出来ている。魔法の法衣や賢者が着ているローブなんかも、この素材が使われているらしい。

それなりに値は張ったが、それだけの価値があることは言つまでもない。

「さてと、目的の物も手に入つたし今度は俺の番だな」

俺はヨイショと立ち上がった。

俺の目的はパプニカの城だ。

旅の商人としてパプニカ城に持ち込みを行う算段だ。

交易国として名高いパプニカの王族。

さぞかし支払いが良いことだろつ。

滅んでしまう前にタップリとゴールドを落としてもらいましょうー。

この国に来て今日で三日目、仕込みはバツチリ抜かりはない。
といつよりも謁見に三日も待つたのだ。

城の門番に王への謁見を申し込む事から始まり、各種の手続きなど結構な時間を食つた。こいつた事は国によつて色々と違つ。

商売を行う際、大抵の国は入国の際に手続きと審査を行う。
結果問題がなければ入国と商売が認められるという流れだ。
パプニカは特にその辺りが厳しい。

俺の持つ商品は何処にも売られていない物ばかりだ。
それ故に適正価格をイマイチ判断することが出来ないらしい。
故に専門の人間を呼び審査を行う。
結果、今まで最も時間を食つた。
これで売れなきや最悪だ。

閑話休題

現在オレは謁見の間にいる。漸く目通りが叶つ。

王座の前で膝を付いて国王を待つ。

俺の隣には持ち込んだ品が台座に載せられており純白の布で隠されている。

暫くすると扉が開き、ゆっくりとした足音が近づく。

足音は王座の前で止まる、腰を下ろした。

「そなたが行商人のタケルか？」

「はつ！此度は拝謁に賜り恐悦至極にござります」

「つむ、面を上げよ」

王の言葉に従いゆつくつと顔を上げる。

威厳にあふれた表情の国王が王座に腰を下ろしていた。
なんていうか凄い存在感だな。

隣にはレオナ姫もいる。

その後ろに控えている三人組は有名な三賢者だらつか？

「聞けばそなたは我が王家の為に貴重な至宝を仕入れたとか？」

「はい、この世に無い一品でござります。

其れは伝説の武具にも勝るとも劣らぬ一品ばかり。

必ずや国王陛下の眼鏡に適う物だと自負しております

「つむ、では早速見せてもらひおつか」

「へえ、気になるわね。早く見せてみなさいよ」

レオナ姫が身を乗り出して先を促した。

原作通り、かなりのおでんば姫のようだ。

「これ、レオナ！」

「「」みんなさいのお父様」

「「」ホン!娘が失礼をした」

「「」え……では」

俺は台座に被せてある布をゆっくりと下ろした。
周りからため息が漏れる。

この世界では伝説級の武具が五品。

そのどれもが見る者を惹きつける輝きを放っている。
本日の商品は「レだ！」

大賢者の杖（使うとフバー・ハの効果）50000G
天使のレオタード（死の呪文を防ぐ）48000G
女神の盾（攻撃呪文を半減させる）40000G
黄金のティアラ（嫌な呪文に掛かりにくくなる）24000G
女神の指輪（歩くとMPが回復していく）15000G

「如何でしょ?賢者の卵である姫様に」

「凄いわ!それを私のために?」

「はい、わざと姫さまにお似合いですよ」

「お父様!」

「……つむ」

レオナ姫は国王に強請る様に声を上げた。

国王はヒゲを撫でるとレオナに向かって顎あごひげを見た。

レオナ姫は嬉しそうに駆け寄ってきて杖を手に取った。
どうやら『大賢者の杖』が気に入つたようだ。

嬉しそうに眺めている。

国王はそんなレオナ姫を微笑ましい顔で見てから俺に向き直つた。

「タケルとやら、そなたの用意した品々、全て貰おつ」

「ありがとうございます」

「これ程の武具を取り揃えるとは誠に大儀であった。

「どうだ？そなたさえ良ければこの国で店を構えてみるとこゝのは

？」

「……え？」

国王の言葉に俺は硬直した。

この話は一商人として、この上無い事だ。

周りの臣下達も国王の言葉に「おお！」とか感心してゐるし。

「確か城下の西区に一画、使われていない土地が有つた筈。

どうじゃタケルよ。

その商人としての手腕をこの国で存分に振るつてみては？」

「それ良いわね、タケルくん。

「どうへ、お父様がここまで言つてくれるなんて滅多に無いわよ？」

マジですか？

それにタケルくんとな！？

まさかダイくんと同じノリで呼ばれるとは思わなんだ。

王様は俺という商人を取り込むことで国力の強化を図る気だよな？
しかしどうするかな？

魔物の動きもますます激しくなつてきている今、戦力の強化は急務だ。

兵士たちの武具や食料などの物資は必要不可欠。
それを用意する商人は是が非でも欲しいだろう。
しかも俺は唯の商人じゃない。特に品揃えが。

確かに平和なら迷わず飛びつく話だ。

けど間も無くパプニカは滅びる。不死騎団によつて。
うん決めた。

「ありがたいお話ですが…」

うん。やっぱ保身が大事ですよね。

俺つて正義の使徒つて訳じやないし。

装備を除けば一般P e o p l e ですから。

「私は自分の商品を尽可能多くの人々の為に役立てたいのです。

現在、魔物たちの動きが活発化しており、

魔王が復活したと噂されております。

確かに陛下の心遣いは大変嬉しいのです。

しかしほくの人々の為にも私は旅を止めるわけにはいかないのです「

「……そつか…あいわかった！」

そなたの心意氣、ワシは感服したぞ！

そこまで言つのなら引き止めることが出来ん。

これから道中、気をつけてな

「ありがとうござります陛下。レオナ姫もお元氣で」

「またねタケル君。君の装備、大切に使わせてもらつわ

俺は最後にもう一度だけ一礼すると、踵を返して謁見の間を後にした。

あー、緊張したー。

さてと用事も終わったしパプニカから脱出しますかね。

次は口モスでも行こうかなあ…。

パプニカから出る前に俺は度に必要な物を買い揃えることにした。食料の方も心許なくなってきたし新しい魔導書も有るかもしれない。そんな訳で買い物開始。

適当な店を練歩くこと半日、保存食と魔導書を数冊ほど購入。時刻は午後八時過ぎか。

俺は腕時計と薄暗くなつた空を見て溜息を付いた。

「「いやパプニカを立つのは明日にした方がいいな」

夜の街道を旅するのは止めた方が良い。
俺はパブニカで一泊することにした。

「こりひしゃこませ。こんな遅くまでお疲れ様です。

ウチは風呂もベッドも最高ですよ！お一人様ですか？」

「あ、はい。部屋は空いてますか？」

「勿論です！お一人様たつたの15Gになります」

俺は15Gぴつたり手渡すと、店員に案内されて部屋に入った。

「お食事はどうなさいますか？」

「自分で用意してあるから構わない」

「風呂はソノの扉の向こうになります」

「あらがとう」

「それではまじゅうくじ」

俺はベッドに身を投げ出して魔導書を開いた。

呪文を覚えるためには習得した系統の魔方陣が必要になる。
魔方陣の中で祈りを捧げる事で、素質ありと認められれば魔方陣が輝き習得することが出来るのだ。俺はドキドキしながら頁を捲った。

手に入れた魔導書は3冊。

1冊目にはメラ系、ギラ系、イオ系の呪文。

2冊目にはキアリー、キアリク、シャナクなどの呪文。
3冊目にはラナ系、フバー・ハ、レミーラ、トラマナ、……あ、ホイミ
系もある。

ホイミ以外は習得してないな。

明日、片つ端から契約してみるかな。

兎に角、攻撃魔法が習得できるのは嬉しい。

敵と正面きつて殴りあうのはガラじやないからな
ていうか怖い。死ぬ。

「さてと、風呂に入つて寝るとするか」

俺は魔導書を荷物にしまい込むと風呂に向かつた。

この世界つて補助呪文も少ないよなあ……。

バイキルトとかスクルト、ピオリムとか無いのかなあ。

本日のタケルのステータス

タケル

性別：おとこ

職業：鍊金術師

レベル：8

さいだいHP：44

さいだいMP：525

ちから：25

すばやさ：26

たいりょく：30

かしこさ：256

うんのよさ：256

攻撃力：103

防御力：70

どうぐ

E：ガンブレード

E：ビロードマント

E：力の盾・改

E：幸せの帽子

E：スーパーリング

E：魔法の弾×10

呪文・特技

鍊金釜 採取 大声 口笛

寝る 忍び足 穴掘り

ホイミ ベホイミ

ヒヤド ヒヤダルコ
バギ バギマ

本日の田玉商品『大賢者の杖』（後書き）

次回はロモスです。

本田の田中尚品『毒消し草』（前書き）

田間ランニング見て驚きました。

まさかの1位！？

練習作行きましたから適当に書いただけなのに…。

本日の田舎商品『毒消し草』

現在オレは一人魔の森を練り歩いていた。

原作キャラの一人、マアムに会つてみたい。

まあチヨットした願望みたいなものだ。

目指すはネイルの村だ。

それにしても魔の森のド真ん中に村を作るなんて何を考えてんだろう？

もう魔王軍が復活したのは周知の事実となつてている。

魔物の凶暴化もますます拍車が掛かり手が付けられないまでになつていた。

しかし魔導書によつて戦闘力を飛躍的に高めたオレに怖いものなど無い！魔物でも大魔王でも掛かってきやがれ！

すいません。ウソです。

現在オレは以前と同じように聖水を巻きながら忍び足で移動中です。確かに魔導書に載つていた呪文は全て契約できた。

しかし実際に魔の森の魔物と進んで戦つほど俺はバカじやない。この森の魔物は今まで旅をしてきた地域の魔物よりも強いのだ。何故なら獸王の支配する森だからだ。

そこに住む百獸魔団は半端じやない。

ライオンヘッジを見た時、俺はチビリそうになつたくらいだ。あれは怖すぎる。

俺の知識にあるライオンよりも一回りでかかった。

しかも羽とか生えてたし。

ライオンヘッジに気付かれない様に逃げ出した俺は気を取り直してネイルの村を目指す。それでも偶に魔物に見つかって襲われたりもするが…。

「ベギラマ…」

「ギャアアアア…！」

習得したての呪文で焼き払う。

俺の放った閃熱ベギラマ呪文はリカントと人面樹を薙ぎ払った。うん、流石はベギラマ。かなりの威力だ。

この世界はギラ系が強い。

なにセイオナズンよりもベギラゴンの方が強いっぽいのだ。

メラゾーマやイオナズンよりもベギラゴンですよ。

ハドラーもベギラゴン習得した時、メチャクチャ喜んでいたしな。俺にもギラ系の素養があつて良かつた。

「おつとレベルアップか」

頭の中でファンファーレが響く。
何度も聞いているのでもう慣れた。

多分この音楽、俺しか聞くことはないんだろうなあ。この世界の人々は、魔物と戦闘以前に普通に修行でレベルアップするみたいだし。レベルアップつて結構凄いと思う。

元の世界に戻つたら間違いなく運動神経チートだよな。
普通に長剣を振り回せる腕力は付いた。

重い荷物を担いだまま走りまわる体力もある。

「でもなあ」

それでもこの世界だと本職の戦士には全く敵わない。
まあ俺は魔法で戦う後衛系ですから。
守ってくれる前衛いなけど…。

「さてと、そろそろ到着してもいい筈だけどな」

俺は地図を見ながら辺りを見渡した。

前方に明かりと煙が見えた。

どうやらネイルの村の様だ。

俺は歩く足を早めた。

素朴で平穏。

それがこの村の第一印象だつた。

入り口から村全体が見渡せるほど小さな村。
家も数える程しか建つていない。

中心の広場を囲むように建てられた民家。

見たところ宿屋は無いみたいだ。

商売を行うにしても、あまり高価なものを買つ余裕はないだろう。

ママムになら安く売つてやっても良いが…。

何せアバンの使徒の強化は平和に繋がるからな。

それにママムは可愛いしな。

「それでも良い村だなあ

この村を歩いていると、世話になつた村を思い出す。
見ず知らずの俺を受け入れてくれたあの村を。

皆元気にしているかな？

1年ほど前に旅立つてから一度も戻つていない。
暇を見て帰つてみるのも良いかもしね。

「やあー！」

その時だった。

俺は何かにぶつかった。

考え事をしていたのが良くなかった。

女の子だった。十歳前後の可愛らしい女の子。

俺にぶつかった拍子で尻餅を付いている。

「大丈夫か？ごめん、考え事をしていたんだ」

俺はそう言いながら女の子の手を取つて起こして上げた。

「うわちいこわゴメンナサイ。えつとお兄ちゃんは？」

「ああ、俺は旅の商人で先刻この

「お兄ちゃん商人さんなの！？」

「あ、ああ」

「だつたら毒消し草ありますか！？」

「勿論あるよ。だれか毒に侵されたのかい？」

「お、お母さんが、バブルスライムに噛まれて……」

俺が事情を聞くと女の子は目に涙を浮かべて肩を震わせた。
成る程、お母さんの為か…。

こんな女の子からお金を見るほど俺は強欲じやない。
それに毒消し草は魔の森で採取してある為、多く持っている。
それに毒消し草を使う必要はない。

「あの、毒消し草……これで足りますか？」

女の子はお金を差し出した。

1G硬貨が5枚。

毒消し草の値段は10G。

女の子は不安そうに俺の顔を見上げている。
俺はそっとお金を持った手を引かせた。

「大丈夫、お母さんの所に案内してくれるか？」

「…ひ、うん！」

俺の言葉に女の子の表情がパアッと明るくなった。

女の子の家に案内された俺は、彼女の母の前に立つ。
ベッドに横たわっている母の顔色は悪く、息を苦しそうだ。
俺は女の子に「大丈夫だよ」と声をかけると母親に手をかざした。

キアリー（解毒呪文）

覚えておいて良かった解毒呪文。

魔法の光に包まれた母親は見る見るうちに顔色が良くなる。

「お母さんー」

光が収まつた時、母親は安らかな寝息を立てていた。

「これでもう大丈夫だ」

「ありがとうお兄ちゃん!」

お兄ちゃんか。

悪くないなその呼び方。

「……私は」

「お、気がついた」

「お母さん、大丈夫?」

「ハーハ……心配掛けで」めんなせー」

女の子は嬉しそうに母親に抱きついた。

それから暫くして。

「本当に何とお礼をつていいか

「本当にありがとう!」

「いえ、こんなに美味しい料理を御馳走になれたんですね。

むしろ」コチラが感謝したいぐらいですよ」

「まあーおかわりは沢山ありますからいっお食べてくださいね」

俺は母親を助けたお礼にと晩御飯をご馳走になつていた。

女の子の名前はミーナ。

なんと彼女は、たつた一人で魔の森に毒消し草を取りに行くつもりだつたのだ。

魔王復活のため凶暴化した魔物の影響で、村に来なくなつた行商人。その所為で村の蓄えも充分とは言えなかつた。

以前買つておいた毒消し草も数日前に無くなつていたのである。街まで行こうにも森は大変危険である。

それでも母の為にミーナは一人でも森に向かおうと考えたのであつた。

ミーナの母、おばさんは「危険なことはしないで」と説教をして、改めてオレにお礼を言つて頭を下げた。

「邪魔するぞ」

「あ、村長様」

家に入つてきたのは優しそうな老人だつた。

老人、村長はおばさんを見ると、不思議そうに首をかしげた。

「ふむ……見舞いに来たのじゃが……お前さん、もう大丈夫なのか？」

「はい、この方の解毒呪文のおかげで」

「そりが、村長として礼を言ひついで」

「いえ……」

「ところの事はママムとは入れ違いになつたのか

「どうこう」と。

「ふむ、ママムのやつがミーナが森に向かつたと勘違いしての」

「ママムおねえちゃんがーー?」

「……なあに、あの娘なら心配はないじゃね?」

「え? と……心配な? って?」

女の子なんですよね? オレも魔の森を通りて来たんですけど

あの森は凶暴な魔物がいてかなり危険なんだけ? …」

原作知識はあるけど一般人なら当然の疑問を突つ込んでおきましょ
う。

するとミーナが自信満々に言つた。

「大丈夫だよ、お兄ちゃん」

「どうこう? と?」

「ママムおねえちゃんは凄く強いんだからー。」

「やうじやな。何せ『アバンの使徒』じゃからのつ」

「凄いなー。じやあアバンの使徒に会えるのかな」

「それだけじゃないぞ。

「マアムの母レイラは嘗て勇者アバンと共に戦った仲間じゃ」

「へえ、英雄の村つて事か」

「オレが感心したふうに言つて、村長はフムと考へにむかひにヒゲを撫でた。

「ふむ、お前さん、魔の森を抜けて来たんじゃつたな」

「はい、結構ヤバかつたですけど……」

「物は相談なんじゃがお前さん、マアムを探してきてくれんか?」

「えつと」

「知つての通り、マアムはミーナを探しに行つた。

ミーナがここに居る事をマアムは知らん。

「のままだと何時までもミーナを探して森を歩き続けるかも知れん」

「村長の言つとも一理ある。
でも正直言つて遠慮したい。

それにもう日も沈んでおり外は薄暗い。
この状態で魔の森を歩くのはマジで怖い。
俺は戦士じゃないしがない商人だ。
けど……。

「お兄ちゃん…」

「の顔には勝てん。

マーナカヤさんは縋るよつた上皿つかいで俺を見てくる。

「村長わざ」

「なんじやへ？」

「の村の人達が毒消し草を採取する場所、教えてもらひても？」

マーナカヤはマーナカヤを探してやへじかであります

「せうじやな。毒消し草の群生地せうじかへ遠くはない。

村を出てロロスの方角に行くと、川が流れである。

その川を下りて南に下れば直ぐじやよ

「お兄ちゃん、マーナカヤお姉ちゃんを呼んでくれるの？」

「ああ、すぐここに来るよ」

「すまんの」

俺は心の中で膝をつき溜息を付いた。

また魔の森を一人で歩くのか…。

しかしその不安以上にマーナカヤは余えるのは楽しみだ。こうなつたら腹をくくるしか無い。

平和なドラクエ世界を取り戻すにはアバンの使徒に頑張つてもひづ
しか無い。

でないと商売上がつたりだ。

俺は荷物を背負うと、ネイルの村の入口を田指して歩き出した。

「後で村長に毒消し草、買つてもらおう」

タケル

性別：おとこ

職業：鍊金術師

レベル：11

さいだいHP：71

さいだいMP：536

ちから：29

すばやさ：36

たけりょく：37

かしこさ：256

うんのよさ：256

攻撃力：107

防御力：75

どうぐ

E：ガンブレード

E：ビロードマント

E：力の盾・改

E：幸せの帽子

E：スープーリング

E：魔法の弾×10

呪文・特技

錬金釜 採取 大声 口笛

寝る 忍び足 穴掘り

ホイミ ベホイミ

キアリー キアリク シャナク

メラ メラミ メラゾーマ

ギラ ベギラマ

ヒヤド ヒヤダルコ

バギ バギマ

フバー・ハ

ラナリオン

トラマナ レミーラ

本日の田中商品『毒消し草』（後書き）

今日は短いです。

次回はダイ達に会いたいなあ…。

そういうえば体力ってHPの成長に関係してるんですよね？

レベルが上がった時、体力×2のHPになるんでしたつけ？

主人公設定（前書き）

予約投稿始めてです。

主人公設定

名前：大江 武 おおえ たける

年齢：16歳

身長：164cm

体重：54kg

この一次創作のオリジナリティ。

現代日本の男子高校生。

成績は比較的優秀。しかし天才ではなく秀才。

好奇心が強く順応性が高い。

ドラクエと少年漫画が好き。

ダイの大冒険の世界では性は名乗らず名前だけ名乗っている。
自称どこにでもいる普通の行商人。

平和な時代に結構荒稼ぎした為お金が大好き。

しかし魔王軍復活と原作キャラとの遭遇でダイの大冒険の世界だと
気づき、魔王軍と戦う勇者メンバーになら役に立つ武具や道具を譲
つても良いと思っている。

全ては平和なドラクエ世界の為。

魔法の才能は天才の部類に入り、現在手に入れた全ての魔法と契約
を成功させている。色々な特技にも精通している。

現在のステータス

レベル：12

さいだい H P : 75
さいだい M P : 536

ちから : 32

すばやさ : 40

たいりょく : 38

かしこさ : 265

うんのよさ : 256

攻撃力 : 110

防御力 : 77

どうぐ

E : ガンブレード

E : ビロードマント

E : 力の盾・改

E : 幸せの帽子

E : スーパーリング

E : 魔法の弾 × 10

呪文・特技

鍊金釜 採取 大声 口笛

寝る 忍び足 穴掘り 大防御

ホイミ ベホイミ

キアリー キアリク シャナク

メラ メラミ メラゾーマ

ギラ ベギラマ

ヒヤド ヒヤダルコ

バギーバギーマ
バギーハ
フバー
ラナリオン
トラマナ
レミーラ

主人公設定（後書き）

描写はないですがママとの出会い前に魔物との戦闘によりレベルアップです。

本日の冊子概略『黙黙の旋律』（前書き）

予約投稿その2

本日の田中商品『星降る腕輪』

鬱蒼とした森をひたすら歩く。

村長に言われた通り、口モスの方角を田指して歩く事十数分。水が流れる音が聞こえ始めた。

川を発見した俺は、川にそつて南に向かう。

「ギャアアアアアーーー！」

いきなりの事だった。

けたたましい叫びが響き渡った。

俺は声の方へと走る。

「うわー！」

俺は火達磨になつて逃げていくりカントとすれ違つ。何が起こつたんだ？

俺はリカントが来た方へと走つた。

少し進むと男女の声が聞こえてきた。

何やら言い争つてゐるみたいだ。

「こんな森ぐらいスパツと通り抜けてやるわいー！」

「その程度の腕で？」

「なんだとー？」

電流が走つたように睨み合つ男女とオロオロと見守る少年。これが原作遭遇つてやつか。

「行こうぜ！ダイ！」

「ちよ、ちよたー！ ホッカウーー」

ポップはダイを引っ張つて行つてしまつた。
あゝあゝ、口モスの方角はそつちじやないつて……。

村長とミーナにも頼まれて いるし、 とりあえず俺は 声をかける」と にした。

「どうしていいか？」

「だれ！？」

「ちいもんじゅないよ。え、と、もしかして君がママ、ムちゃん？」

ええ、とにかく私の名前を[]

ネイリの村の村長さんは駄まわでれ
君を呼びは来たんたよ」

アーティストヨミ　アーティスト女のが一ノ瀬同人たの】

卷之三

「ぐんたけらも、ガチャさんは森に入つたんだ」

俺はママに事情を説明した。

「ママムはミーナが一人で危険な森に入つていない事に安堵し、また母親が無事だつたことも心から喜んだ。マジで良い娘なんだ。眩しそぎる。」

「ありがとう。ミーナの事もおばさんのことも…」

「べ、べつに良じよ」

「……あれ？」

「どうした？」

「これ…」

ママムの視線を追つてみると、丈夫そうな布袋が落ちていた。

「さつさの一人が落としたのかしら？」

「みたいだね。ここに置いておくのも何だし、取り敢えず持つて行こうか？」

「そうね」

「改めて自己紹介するよ。俺はタケル、商人だよ」

「知っているみたいだけど、私はママムよ。ミーナとおばさんの事、本当にありがとうございます」

「いいよ。それよりもあの勇者アバンの使徒なんだつて？凄いカッコイイよな。オレ、憧れるよ」

マジで。

遠田から魔弾銃を撃つといふ見たけど、マジでカッコよかつた！
本物はやつぱり違つわ。

「ん、そんな事ないわよ」

「いやいや、本当に凄いって！」

オレなんて最低限の自衛能力しか身につけてないからやれ」

「くえ、でも一人でこの森を抜けでくるのは素直に凄いと思つわよ」

「はは、おっヒー、それよりも早くミーナちゃんを安心させいやらないと」

忘れるといひだつた。

マアムと会えてテンション上がりすぎだらオレ。
それに魔の森で立ち話は危険過ぎる。
マアムには何でもないけどオレに命の危険。
早く帰らないとヤバイ。

「やつねー急いで村に戻りましょ！」

「あ、帰ってきたー、マアムお姉ちゃんー！」

村に入ると、ミーナちゃんと村長さんが迎えてくれた。

どうやら入り口で待つていてくれたみたいだ。

それに村の人だろうか。

皆が入り口に集まってきた。

一人を心配して村人が全員やつてくるなんて本当に良い村だな。

「ただいま、ミーナ」

「ママム。」苦労じやつたな

「結局無駄足でしたけどね」

「なに、無事で何よりじゃわい」

「俺からも礼を言つよ。娘のために有難う」

ミーナの父親だろうか。

中年の男性がママムに頭を下げた。

「お礼なら私よりも、このタケルに言つて上げて」

「ありがとうございます、妻の治療まで行なつてもうつて」

「いや、良いよ」

なんだかしんみりした空気になつたな。
村長が申し訳なさそうに口を開いた。

「ママム…お前にはすまないと思つておる。

」の村には男手が少ない。いつもお前には危険な目

「みんな城を守りに行つてゐるもの。仕方ないわ」

「ウム、国王が倒れてしまつてはお終いじゃからのう」

皆の表情は更に暗いものになる。

いくらアバンの使徒とはいへ、マアムの様な娘がたつた一人で村を魔物から守つてゐるのだ。村の人たちも心中穏やかじやないだろう。そんな村人たちに、マアムは励ますように明るく言つた。

「大丈夫よ！この村は私が守るわ！」

漫画で見るのとは訳が違つ。

この世界を一人で旅をしてきたから分かる。

魔物の脅威を。

その驚異からたつた一人でやうやく言つのだ。
すごい勇氣だ。

それに比べてオレは…。

「そうだよ！マアムお姉ちゃんは魔物モンスターみたいに強いんだ！」

「そうだね！大丈夫さ！」

「こり！だれが魔物ですつて！」

「あははは！」

子供達の言葉にゲンコツで答えるマアム。

雰囲気は一気に明るくなり、村人たちに笑顔が戻つた。
凄い、これがアバンの使徒か…。

「ねえ、お姉ちゃん。それ何？」

ミーナはママムの持つ布袋を指さした。

「ええ、森で出会った妙な一人組が忘れていたのよ

「開けてみようか？」

いたずら心と好奇心か。

子供が布袋の紐を解いて開ける。

すると、その隙間から黄金の光が放たれた。

ポン！

そんな音と共に飛び出してきたのは一匹のスライムだった。

「スライムだ！」

「離れて！」

魔物の出現。

ママムはこれまでの経験に基づき反射的に魔弾銃を抜いた。金色のスライムはいきなり人間に囲まれて困惑している。そしていきなりママムに銃口を向けられ怯えた表情を見せた。銃口とママムの鋭い眼光、スライムは耐えられずに…。

「……………ピ、ピヒ~~~~ン…………」

泣き出しちゃった。

「こじめちや可哀想だよ」

全くもってその通りである。

ミーナちやんは正しい！

マムはミーナに言われてバツが悪そつに銃をしました。

一方その頃

魔の森の奥深くにある洞窟。

太陽の光を全く通さない最奥では一匹のリザードマンが寝息を立てていた。

ただ、普通のリザードマンとは大きさも威圧感も一線を画している。

「クロ「ダインよ……獣王クロ「ダインよ」

低く威圧的な声がリザードマンに掛かる。

声に反応してリザードマンが目を開いた。

「誰だ？ 何のようだ？」

視線の先には何本もの触手を生やした目玉の怪物『悪魔の目玉』が洞窟の天井に張り付いていた。声は悪魔の目玉から発せられている。

「クロ「ダインよ」

悪魔の目玉の眼球から映しだされたのはクロ「ダインの上目。

魔軍司令ハドラーだつた。

「おおつー！これは魔軍司令殿！失礼をした！」

クロコ「ダインは武人としての礼儀を取り姿勢を正した。

「どうしたのだ？お前にはロモス王国の攻略を命じていたはず」

だといふのに洞窟で眠っていた部下にハドラーは鋭い眼光を向けた。クロコ「ダインはその視線を受け流して頭を振つた。鼻で笑う。

「だめだ、だめだ、あの国は…」

吹けば飛ぶような腰抜けばかりよ。強い奴など一人もおらんわ

クロコ「ダインの言い分、それは団長たる自分が出るまでもない。配下の魔物たちに任せとけば後数日ほどでロモスを攻略できるとの事だ。

「相変わらずだな…。だが今日はその件ではない。

我が魔王軍に楯突く輩が今、魔の森に迷い込んであるのだ。お前の手で始末してくれ」

「なに？どんな奴だ！？」

悪魔の目玉が映し出しているモノが変わる。

映しだされたのは自分がよく知る場所、魔の森の風景。そして森を歩く一人の少年。

少年の一人の方の顔が大きく映しだされた。

まだ十歳を過ぎたばかりに見えるあどけない表情の少年。

「……」

「……」

「……」

クロコダイルは顎が外れんばかりに大口を開けて固まつた。まさか軍団長たる自分に勅命が回ってきたと思えば、倒す相手は人間の少年だったのだ。この上司は何を考えているのか。

そう思うと呆れるのを通り越して笑えてくる。

「くく……、ワハハハハ！」

「何がおかしい？」

「冗談は止めてくれ。

仮にも獣王と呼ばれる俺に、こんなガキの相手をしろといふのか？」

「ガキだと侮るな！」「イツは信じられないような底力を秘めておる

ハドラーは何かを思い出したように呑々しそうに拳を握りこんだ

「……」の俺も手傷を負わされたわ！」

「なんだとー？ハドラー殿に傷をー？」

クロコダイルはハドラーの告白に驚愕した。

「そうだ！まだ力を付けていない内に殺されば必ずや我等が難敵となり立ちふさがるだろつ……」

「ぐふふ……、面白いつー」

クロコダイルは口を吊り上げながら立ち上がった。

その表情は歓喜に震えている。

好戦的な笑を浮かべながら側にあつた大斧を手に取つた。

「ハドラー殿を傷つける程の小僧……っ！
是非とも戦つてみたくなつたわ！」

その眼光は武人としての誇りに溢れていた。
クロコダイルの表情にハドラーは確信した。
コイツならば間違いなくダイを葬ることが出来るだろうと。

「では任せたぞ……確実に葬れ！」

悪魔の目玉はその瞳を閉じた。

「かわいーっ」

ネイルの村にあるミーナの家。

先程の金色のスライムが机の上にいた。
ミーナはふるふると揺れるスライムと遊んでいた。
幻の珍獣「ゴールデンメタルスライム」
知る人ぞ知るまさに生きた宝石。
それよりも……。

（神の涙か……）

原作知識。

オレは『メちゃんの正体が『神の涙』だと言う事を知つていい。

あらゆる願いが叶う願望機。

ゴメちゃんに願えば元に世界に帰れるかも知れない。

しかしオレは直ぐに頭を振った。

正直に言つて、オレは元の世界にあまり未練はない。

高校生だったオレがこの世界にきてもう一年以上の時が経つ。

戻つたところでどうなるというのか？

学校は面倒臭いと感じていたし、卒業後の進路も全く見えてなかつた。

しかしこの世界は居心地が良かつた。

スキルの恩恵で商売は順調だつたし、好きなドラクエ世界の武具や珍しい道具を手元においてある現実は本当に気分が良かつた。

魔王軍によつて平和が脅かされているが、いづれダイ達が世界を救つてくれる。

今的生活を捨てて元の世界に戻るのは抵抗感が生まれるのだ。

（やっぱり戻りたくないな……叔父さんには悪いけど）

現実世界の便利な文明の利器と様々な社会のじがらみ。

ドラクエ世界の自由な生活と魔物の脅威。

天秤にかけると矢張り自分に帰る選択はなかつた。

それに自分には両親はいない。昔交通事故で亡くなつている。世話になつてゐる叔父も負担がなくなると思えば都合が良い。

（それに『神の涙』にちょっとかい掛けて魔王に知られる訳にはいかない）

オレは思考を切り替えた。

マアムは壁にもたれ掛かつてスライムを見ている。

無害とはいえ、魔物とミーナと一緒にするにはまだ心配なのだ。

「どうしたもんかしりつ。」

「マアム、その一人組み、もしかして口モスに行くつて言つてなかつた？」

「どうしてそれを？」

「いや、ネイルの村を素通りしたんだ。一番近い街は口モスだろ？」

「わづね……」

「で、どうするんだ？あの子、雇けるのか？」

「わづね。今頃困つてこらかもしれないし……」

マアムはため息を付いて言つた。
その時だつた。

ドオオオオン！――――――！

大きな地響きが響き割つた。

マアムは顔色を変えて外に飛び出した。
オレも後に続く。

外に出るとマアムは軽い身のこなしで陸根に飛び上がつた。

「森が燃えてる……」

轟々と燃え盛る魔の森。

これは只事じやないだろ？

マアムは直ぐに家の中に戻ると、置いてあつた武器を取つた。

ハンマーロック。

強い打撃力を持つが、その重量の為に鍛え上げた戦士にしか操れない武器だ。

「ママム、もしかして行くのか？」

「ええ、これは只事じゃないわ。タケルはミーナといつて聞いて

ママムはオレの返答を待たずに駆け出した。

不意にズボンをギュッと掴まれた。

「お兄ちゃん…」

ミーナは不安そうな表情をオレに向ける。
オレはママムの後を追いつもりはない。

何故なら行く必要がないからだ。

俺が何もしなくても、ダイ達はママムの助けで生き残る。
それにクロ」「ダインなんて化物、俺が行つても意味が無いと思つのだ。
しかし…。

「後を追つ気、無かつたんだけどなー」

「え？」

俺はミーナの手を優しく取ると腰を下ろしてミーナと同じ高さで視線を合わせた。

この世界が原作通りに進むかどうかはまだ分からぬ。
正直怖い。でもそれ以上に興味がある。
今から急いで追えば間に合つかもしない。

俺は道具袋から『星降る腕輪』を取り出した。

「//ーーナちゃんは、家から出でや駄目だよ」

オレは星降る腕輪を装備した。

「お兄ちゃん…」

「ううと行つてやるよ」

オレはマムの向かった先、燃える森に向かって駆け出した。

本日のステータス

レベル：12

さいだいHP：75
さいだいMP：536

ちから：32

すばやさ：80

たいりょく：38

かしこさ：265

うんのよさ：256

攻撃力：86

防御力：97

どうぐ

E・砂塵のヤリ

E・ビロードマント

E・力の盾・改

E・幸せの帽子

E・スーザーリング

E・星降る腕輪

E・魔法の弾×10

呪文・特技

鍊金釜 採取 大声 口笛

寝る 忍び足 穴掘り 大防御

ホイミ ベホイミ

キアリー キアリク シャナク

メラ メラミ メラゾーマ

ギラ ベギラマ

ヒヤド ヒヤダルコ

バギ バギマ

フバー・ハ

ラナリオン
トライナ レリーラ

本日の田玉商品『星降る腕輪』（後書き）

オリ主の正義に田覚めたとも見える行動。

ですが結局は保身に繋がります。

自分は魔王軍怖い戦いたくない。

でも戦いを間近で見たい好奇心もある。

ダイ達は世界を救う。

もしも万が一にでもダイが負ければ世界は滅ぶ。

結果、自分の平穏な商人生活は永久にやつてこない。

だつたら手助けすれば良いじゃないか？

役に立つ武具や道具もあるしヤバくなれば逃げれば良くな?

キメラの翼があれば屋外なら逃げられるだろ？

一応、主人公の思考回路です。

結構ひどい奴に映るかもですが、道具系のチートを得ただけの男子学生なんてこんなものかな？

本日の田中商品『砂塵のヤツ』（前書き）

ここから少しずつオリ主の成長…。
いえ、周りからの勘違いが始まります。
オリ主の保身と好奇心に繋がる行動が結果…。

本日の皿用商品『砂塵のヤツ』

現在オレは魔の森を駆けていた。

流石は『星降る腕輪』と言つべきか。

今まで体験した事の無い感覚だ。人間つてこんなに早く走れるのか。めまぐるしく流れる風景に感心しながらオレは更にスピードを上げる。

暫く走ると森の闇に人影が一人見える。

マアムがポップに詰め寄つてゐるみたいだ。

「まさか、見捨てて逃げてきたんじゃないでしょうねー」

「ち、ちちち 違つ、ちがつー。」

「じゃあどうしてのよー『えーーー?』

マアムは激しい剣幕でポップを怒鳴りつけている。

「… フーー?」

ライオンヘッドが倒れている。

おそらくマアムがぶつ飛ばしたのだろう。

だが…。

倒れているライオンヘッドがゆつくつと起き上がった。

「あぶないー伏せろー！」

咄嗟の事だった。

オレは反射的に掌をライオンヘッドに向けていた。

多分、ポップとマムを察じてでは無いと思つ。

ライオンヘッドの怒りに狂つた表情にオレの防衛本能は警報を鳴らしている。

オレは力の限り叫んだ。

「バギマアアアッ！……」

放たれた風は渦巻き木の葉や枝、小石を巻き込みながらライオンヘッドに吸い込まれた。

「ギヤアアアアアアッ！……」

うつう、グロい……。

ライオンヘッドは全身を切り刻まれながら吹き飛ぶ。

血を撒き散らしながら前足が、羽が尻尾が真空の渦から飛びだす。風が止むと、そこにはグチャグチャのスプラッタ状態の肉塊が残つた。

マジで怖かった……。

こりや暫く肉は食えないな。

「あ、ありがとうタケル。でもどうして……？」

ポップから手を離したマムが話しかけてくる。

「いや、それは……」

い、言えない。

好奇心に負けたなんて。

マムは少なくとも命がけで村を出た筈。

オレもある意味命がけだけど、全ては保身に直結する。

好奇心は猫を殺す。行動に矛盾があるがオレは好奇心に負けた。やつとの思いで搾り出した答えは…。

「し、心配だつたから…」

「やつ、ありがとう…」

「いや、それよりも、もう一人の子は…？」

「はつ…？やうだつたわ！」

「ちよ、ちよっとも待てよ！もしかして助けに行く気か？」

「当たり前でしょ…？あんたそれでも仲間なの…？」

「さつき言つただろ…？現れたのは軍団長の一人！
とんでもないバケモンだつたんだぞ…？」

「ちよつと待て…？」

「本気で行かないつもりかポップ！」

「それは不味い！」

「ダイが死んだらどうしてくれるんだ…？」

「だから急ぐんだろうが…あの子が死んでも良いのか…？」

「うぐつ…？」

「オレの激しい一括にポップは口もつた。

「さつさと案内しろ！ケツ蹴つ飛ばすぞ！」

「どわつ！わ、わかつたよ！」

後で自分を殴つてやりたいと思った行動だった。
何様だよオレ…。

ダイが死ぬ＝魔界浮上＝人類滅亡＝オレ死亡。
この公式が頭に浮かんだオレはかなり必死だったと思う。
今のオレならクロコダイントだつて表面きつて立ち向かえるはず。
オレとマアムはポップの後を追つた。

……無理。

何が無理だつて？

クロコダイント正面切つて立ち向かうだよ！

オレの視線の向こうではクロコダイントがダイと対峙していた。
掲げた巨大な斧が、激しい突風を生み出している。

あれが真空の斧だらう…。

つか怖すぎる！

殺氣で目をギラギラさせた一足歩行の巨大なワニ。

メチャクチャ怖い！

アレと睨めっこだつて出来るか！

そしてオレはダイの凄さに驚愕した。

だつてたつた一人であの化物と戦つてるんだ！
さすが勇者様だよ。

「今だ！海破斬！」

ダイはクロコダイントが放つた真空の刃を切り裂いた。

海破斬の衝撃波はクロコダインの鎧を裂き、後退させる。

「何イー!?」

ダイは好機とばかりに飛びかかった。
しかしそれは悪手だつた。

「カアアツーー!!」

「うわーー!」

突如吐き出された激しい息吹攻撃^{ブレス}。

空では身動きの取れないダイはまともに食らつてしまつ。
ダイの全身を焼け付くような痛みが襲う。

焼け付く息
ヒートブレス

クロコダインの切り札だ。

コレを受けた者は、全身が麻痺し動けなくなつてしまつのだ。

「オレに傷を負わせるとは噂通り大した小僧だ」

しかし。

それでもダイは身体を引きずつて落とした武器を取ろうとする。

「もう寄せ、お前はよく戦つた。

オレは勇者を名乗る大人の戦士と星の数ほど戦つたが…
それでもお前の方が余程強かつたぞ」

クロコダインは止めとばかりに真空の斧を振りかぶつた。

「少々惜しいが楽にしてやる」

ヤバイ！

ダイのピンチ！

「ダイ——っ！」

ポップは走りながら杖を構えた。

「そうはさせん！」

クロコダイルは真空の斧を使い突風を生み出す。

「これじゃあ近づけない！」

マアムは徐に魔弾銃を取り出した。

銃口をクロコダイルに、ではなく倒れているダイに向けた。

「おい！何処狙ってるんだ！敵はクロコダイルだぞ！
おい！…や、やめる……っ……！」

ポップの制止の叫びと同時に引き金が引かれた。
放された光線はダイへと吸い込まれる。

「なにするんだ！？氣でも狂ったのかよ！」

「落ち着いて！ほら！」

マアムの指先を追うと、ダイの体が回復魔法の光に包まれていた。
焼け付く息によって傷ついた身体は見る見るうちに元に戻り……。

「う、動く……動くぞ！」

「おのれ！」

ダイは起き上がりつてナイフを拾い上げるとクロコダインと距離を取つた。

「いつたいどうなつてるんだ？」

「もしかしてキアリクか？」

「そうよ」

オレの回答に「マアムは肯定して魔弾銃から弾を抜き取つた。

「キアリクを込めた弾を撃つてあの子を助けたの」

魔弾銃。

火薬の代わりに様々な魔法を込めて撃つ鉄砲。

原作同様にマアムは説明してくれる。

商人としては欲しい一品だぜ。

話し込んでいた間に再びオレたちを突風が襲つ。

見るとクロコダインが再び真空の斧の力を発揮していた。オレたちを近づけない氣か！

今のダイでは一人でクロコダインを倒すことは出来無い。

「あの武器を何とかしないと……」

マアムは閃いたようにポップに聞いた。

「そりだ！あんた、氷系呪文出来る！？」

「おお！オレの氷系呪文と言えば天下一品と評判で…」

「貸してくれ！」

「あ！」

ポップの皿檻に付き合つてゐるヒマはない。

オレは「マアムから弾丸をひとつたくると呪文を唱えた。

『氷系呪文』

弾丸に確かに吸い込まれる感覚。

それを確認したオレはマアムに弾丸を手渡した。

「マアム！」

「…え、ええ！」

一瞬戸惑いを見せたマアムだが直ぐに氣を取り直して弾丸を魔弾銃にセットする。銃口を真空の斧に向けた。

「死ねいつ……！」

「今だ！」

ダイに向かつて斧を振り下ろす瞬間。
マアムは狙いを付けて引き金を引いた。

ヒヤダル」の呪文を込めた弾丸は見事に箭に命中。

「うむ…、おおおつ…？」

真空の箭はジキビキと音を立てて凍りつく。

氷はクロコダイルの腕まで覆い込んだ。

ダイがこの機を逃すはずがなかつた。高く跳躍する。

「クロコダイル…これでもくらえ…！」

「しまつた！朝日がつ…？」

ダイの背後の太陽光によつて田を塞がれたクロコダイル。

「でやああああああああああ…！」

ダイの会心の一撃がクロコダイルの片田を奪つた。

「ぐわああああああ…！」

ズウン…！

轟音を立ててクロコダイルは大地に倒れ伏した。

「ダイーッ！？大丈夫かーつ！」

オレたちは倒れかけているダイの体を駆け寄つて支えてやつた。

「ポップ…、ひでえよ、逃げちゃうんだもんな…」

「いや……あ、あはは……」

ダイの言葉にママアムはポップを睨みつけた。

「回復呪文」
ベホイミ

オレはダイにベホイミを掛けながら、クロコダイルに注意する。このまま終わる訳がない事を知っているからだ。

「あ、ありがとう……」

「あなた、回復呪文まで……もしかして賢者?」

「いや、商人だよ。呪文の才能だけはあつたみたいで……つー」

クロコダイルが起き上がった。

ダイ達もオレの表情を見て視線の先を見る。

そこには片目を潰され怒りの形相を向けるクロコダイルがいた。

「グゥウ……

よ、よくもオレの力オニ……いやー

オレの誇りに傷を付けてくれたな……つー！」

その表情にオレの身体は完全に硬直していた。

蛇に睨まれた蛙である。本当にこんな状態があるのか！

マジで怖すぎる。つづづく思ひ。

チートな能力を得ても所詮オレはしがない学生でしかない事を。

「お、覚えていろよ！」

……ダイ！お前はオレの手で必ず殺す……！」

その形相に恐怖を覚える一行。

クロコダイルは鬪氣の塊を地面に向けて放った。
そして出来た穴に飛び込んで姿を消した。

どうやら助かつたみたいだ。

緊張が切れたオレはその場にへたり込んだ。

「どうにか助かつたな…」

「そうね。それにしてもタケルには驚かされたわ」

「いや、オレもアバンの使徒の凄さを改めて知ったよ」

「「ええ！？」

オレの言葉にダイとポップが目を向いて驚いた。

「お、オレも！俺達も、アバン先生の弟子なんだよー。」

「そ、そんなの？」

ポップとダイは首飾りを取り出して言った。

「アバンの印…」

マアムも胸元から『アバンの印』を取り出した。
マジで乳でけーな…。

「そうだったのか…道理で強いわけだ」

ダイは納得したように微笑んだ。

「どうだ？ 傷の方は？」

立ち上がってダイに聞いた。

「もうすっかり。爺ちゃんのベホイミョウつきへよ

そりゃ光栄だな。

こいつやってダイの傷を治すのも好感度アップの為。
そりゃ子供が傷つくのには思うところはある。
でもそれ以上にダイに死なれるのは不味すぎるのだ。
オレの平穀を取り戻してくれるのはダイ達だけなのだから…。

「攻撃呪文に回復呪文…おめえ、賢者か？」

「ママムにも言つたけど聞こえてなかつたのか？」

オレは唯の旅の商人だよ。呪文がちょっと得意なだけな

「でも本当に凄いと思うわ。

ここに来る時も私たちの足についてきたんですけど。
かなり鍛えたんでしょうね？」

「へえ~

ダイも感心したように俺を見た。
いいえ。

星降る腕輪の力です。

そんなに尊敬の眼差しで見ないで下さい。

「あれ？ その傷…」

マアムは俺の腕を取つた。

何時の間にか腕から血が流れている。

「多分、どこかで枝にでも引っ掛けたんだろう。
こんな傷くぐらいで舐めときや治るよ」

「ダメよ」

マアムは回復呪文を唱えて傷を直してくれた。

人に回復呪文を掛けてもらったのは始めてでちょっと感動。

「あ、ありがとう…」

「どういたしまして」

その様子を見ていたポップが遠慮がちに頭をかきながら言った。

「あ、あの…、俺にもひとつ回復呪文を…」

「ベチ！」

マアムは薬草を投げつけて返答した。

「はい薬草」

「て、てめえ！ なんだよこの待遇の差は…？」

「臆病者と勇者の差でしょ？！」の人は商人なのよ？」

「ごめんなさいポップ、マアムさん……。

俺は臆病者です。断じて勇気なんて無いです！

これで次回の戦い逃げれば幻滅されるかな？

「本当は臆病者です！」なんて今更言えない……。

澄まし顔で無視するマアムと喚くポップ。

ダイはその様子に思わず笑い声を上げていた。

（せっかく逃げる為に用意した砂塵のヤリ、意味なかつたな）

いざとなればマヌーサの効果で逃げようと思つていたが……。

無駄になつたのは喜ぶべきか残念がるべきか……。

俺は日の登り始めた空を眺めながら溜息を付いた。

「ああ……これで魔王軍に目を付けられたかも……」

まだ大丈夫、だよな？

本日のステータス

レベル : 15

さいだい HP : 89
さいだい MP : 546

ちから : 42

すばやさ : 100

たいりょく : 45

かしこさ : 275

うんのよさ : 256

攻撃力 : 96

防御力 : 107

どうぐ

E : 砂塵のヤリ

E : ビロードマント

E : 力の盾・改

E : 幸せの帽子

E : スーパーリング

E : 星降る腕輪

E : 魔法の弾 × 10

呪文・特技

鍊金釜 採取 大声 口笛
寝る 忍び足 穴掘り 大防御

ホイミ ベホイミ
キアリー キアリク シャナク
メラ メラミ メラゾーマ
ギラ ベギラマ
イオ イオラ
ヒヤド ヒヤダルコ ヒヤダイン
バギ バギマ
フバー ハ
ラナリオン
トライマナ レミーラ

本日の新商品『砂塵のヤツ』（後書き）

クロコダイルを退けてレベルアップ！
しかし臆病者です。

もしもクロコダイルが退かずに襲いかかってくれば間違いなくオリ
主は死んでいたでしょう！

流石運の良さ256とダイの主人公補正。

本日の三井商品『鉄の剣』（前書き）

予約投稿は便利ですね。

赤い『兵』さんのファンのかたスマセン。
先に謝つておきます。

気分を害される方もいるかも知れません…。
やつつけた感が拭えない今回。

本日の目玉商品『鉄の剣』

辛く走る口口ダイシを知りたいたい達。

一行は一旦ネイルの村に帰還し旅の疲れを癒す事になつた。

「...」

「『』メちゃん！」

ダイ達は「メちゃんがついてきた事に驚き、また再開を喜んだ。

「それにしても『メちゃんは凶暴化しないんだな』

「そ、うなんだよ。こいつにはなにか不思議な力があるのかもな」

「とにかく会えて良かつた。ありがとう！」マアム、タケル

「えりこたつねつて……あ、ねぬれえ」

人垣から出てきた優しそうな妙齡の女性。マアムは嬉しそうに女性に駆け寄った。

「紹介するわ。母のレイラよ」

ママは親娘並んで紹介。

並んでいると「君を」ひらして見ると良く似ている。

「ねえお母さん、この子達もアバン先生の弟子なんだって」

「まあ！アバン様の！？」

レイラは嘗て夫ロカとアバンと闘つた仲間らしい。

戦士口力と僧侶レイラ。

間違いなく英雄だ。

僧侶と戦士の力を受け継ぐマアムは『僧侶戦士』といつ事だ。

「ところでアバン様はお元気ですか？」

レイラの言葉にダイは氣まずそうにポップと顔を見合せた。ポップは言ひづらそうに俯く。

「……え、えつと」

「げ、元気ですよー。」

ダイはポップの言葉を遮りながら無理やり笑顔を作った。

「やつやもつ、ピンピンしますよー。」

「そうですか。良かつた」

レイラは嬉しそうにニーッコリと微笑んだ。

「ふむ、素晴らしい品揃えじゃのう」

「はい オレ自ら作り、仕入れた品々ですよ」

オレは現在、村長の家に来ていた。

村長と商談を行なっている。

魔王軍の復活に伴い商人が来なくなつた村に蓄えの余裕は殆ど無い。村に戻つてきた後、村長は直ぐにこれから村の事を相談してきたのだ。

商人であるオレに食料や薬草などを売つて欲しいのだとか。

「大した金額は払えぬが、何とかならぬものかのう…」

「いじつちとしても商売ですからね。

まあ、多少は勉強させていただきますが」

「ああ、それは有難い！」

……それから、すまんが村を守るためにも…」

「武具が欲しいのですか？」

オレの前に並べられているのは薬草や毒消し草に食料だ。袋から次々と取り出したオレに村長はそれはもう驚いていた。やはりゲーム仕様の四次元袋は見た事がないようだ。

付け加えると、この袋はオレしか使えない。

ゲーム同様に盗まれる事は無いのだ。

オレ以外の人間は袋に物を入れることも取り出すことも出来無い。

「つむ、武具が高価な事は承知しておるが…
マアム……、あの娘だけに負担を掛け続けるのは…」

この村は本当に良い村のようだ。

村長を始めとした全ての村人がマアムの身を案じている。

まさに『一人は皆のために皆は一人のために』だ。

オレはドケチだが人情がない訳ではない。

それに今は平和な時代とは異なり非常時だ。

オレは鉄の剣や槍、盾を次々と取り出していく。

鎧や兜は……まあ要らないだろう。動けなくなるだろうし。

鍛えていない村人が完全武装は無理がある。

本日の商品はコレだ！

鉄の剣（1000G）

鉄の槍（1350G）

鉄の盾（900G）

「村人の男性の人数分、用意できますが如何いたしますか？」

「ううむ……、村にそんな金はないわい」

村の人口はそれほど多くはない。

若者の多くは城を守るために徵兵されているからだ。

武器を扱える男性は大体十人くらい。

それでも人数分の装備を揃えれば大金になる。

「そうですか、ならレンタルはどうでしょう？」

オレは予てより温めていた計画を初めて見ることにした。

「レンタルじゃと？」

「はい、これらの装備を格安でお貸します。

期限は1年間、値段は本来の十分の一でどうでしょう？」

「うむ……」れならば何とかなりそうじゃな
しかし良いのか？食料や薬草に加えて武具まで…
ワシが言うのも何じゃが、お主にも生活はあるじゃね？」

「心配は要りませんよ。

村長はオレよりも村の事を考えてあげて下さー

「……すまぬ

村長は申し訳なさそうに俯いてしまった。

いや、ママムの生まれ故郷だし、この先の事を考えるとね……。
それにママムは間違いなくダイ達に付いて旅にしてしまうのだ。
ママムの価値と天秤にかければ全然足りないくらいだ。

こうして武具を貰えておけばママムの心も少しは楽になる筈。
結果、オレの保身に繋がる！

「長老様、タケル！」

「ダイ？」

やつて来たのはダイだつた。

何やら真剣な面持ちでオレたちを見ている。
そして意を決したように口を開いた。

「どうか俺に、魔法を教えて下さー……」

「何じゃとー？」

「はー！俺がこの村ここる間だけでいいんです」

「ダイ……」

「俺だけが呪文が苦手だなんて言つてられない！」

「しかしじゃな……

確かにこの村ではワシが一番の魔法の使い手じゃ
だがアバンの使徒である君に教える程の力は無いぞ」

「右に同じく」

俺も人に教えるほどじゃない。

俺の魔法の使い方は中二全開の妄想力と魔法力に頼った力づくりだ。
多分、参考にはならないだろう。
某・赤い】兵よろしく「想像するのは常に最強の……」みたいなノリ
でやつてるのだ。
やばい、考えれば恥ずかしくなつてきた。
絶対に人には教えられないな。

「俺、先生には3日しか修行を受けてないんだ」

ダイは頭を伏せて消え入りそうな声で言つた。

「なんじゃとー? ビー? ビー? とじやー? ー? ー?

ダイは悲しそうな表情を上げて告白した。

「長老、それにタケル……

ママムやおばさんには絶対に言わないでトセー……
先生は……

アバン先生は死んだんですね……

ダイは涙を流しながら言った。

握りこんだ拳と肩が震えている。

見てられないな。

俺はダイから田を逸らした。

「…あ」

森の向こうに誰かが走り去っていく。

あの後ろ姿はマアムだった。

オレたちの話を聞いていたのだろう。

これで原作通りマアムはダイ達と旅立つ。

喜ぶべきなんだろう。

だけど…。

「やりきれないよな…」

アバンは実は死んでいない。

教えるのは簡単だ。

けど、何故オレがそんな事を知っているのか矛盾が生まれる。

それだけではない。

アバンが心を鬼にして身を隠した意味が無くなってしまう。

オレ自身も力を貸すなら、ダイ達の成長を阻害しない程度にしなければ。

これはさじ加減が難しい。

「タケル？」

「…あ、ああ。ごめん、ダイ
魔法の修行か……。」

オレも感覚的に使つていいだけだし…

「その感覚を教えて欲しいんだ」

「俺からも頼むよ」

「ポップ！」

何時のまにか現れたポップもオレに頭を下げた。

「俺に出来るのは手本として実際にやつてみせる事だけだ
それでも良いなら構わないけど…」

「充分だよーありがとうー！」

「ならばワシも微力ながら手助けさせてもらひつかの」

こつしてダイの魔法の修行が始まった。

ダイは殆どの呪文の契約を既に済ませた後らしく契約の必要な無い
どうやら故郷で育ててくれた『じいちゃん』が自分を魔法使いにする
為に片つ端から契約をさせたらしい。

魔法を扱う素養と準備自体は問題ないのである。

「じゃあ取り敢えず火炎系呪文からだな」

取り敢えず最も魔法力マジックパワーを消費せずに簡単なから挑戦。

俺の知る限り呪文とは先天的な資質があれば誰にでも使つことの出来るものだ。

契約によって魔法の力を宿し習得する。

そして魔法力、力量ともに足りていれば魔法は発動する。

そんな具合だ。

オレに促されて火炎呪文を唱えるダイ。
しかし呪文は巧く発動しない。

掌にマッチで付けたような小さな火が出るだけだ。
何度も唱えるが結果は同じ。

ダイは子犬のような目をオレに向かた。

「じゃあオレがやつてみせる。ダイ、良くな見ててくれ」

「うん！」

オレの先には藁や木の枝で出来た人形が立てられている。
オレは指先に魔法力を集めプラス方向にイメージする。

こういう時に原作知識が役に立つ。

想像するのは常に最強の自分……なんちやつて。

「すげー」

オレの指先に瞬く間に火球が生み出された。
その大きさは大体バスケットボールくらいだ。
赤い炎はオレの想像力によつて黄色に変わる。
あ、ちょっと間違えた。

「火炎呪文！」

撃ち出された火球は轟々と音を立てながら人形に命中。
一瞬で人形を灰に変えた。

「な、なな…」

振り変えると全員あんぐりと口を開いて固まっている。やり過ぎたか？

確かに先刻のメラはメラミ並の威力があつたからな。現代で生きたオレは炎の色によつて温度が変わつてゐる事を知つている。

魔法とは集中力とは良く言つたものだ。鍊金術師たるオレに相応しい使い方だ。

「あ……あれのど^{メラ}」が火炎呪文だーどつみでもメラミだりー。

「凄いやー…どつやつたらそんな風に魔法が使えるの」

ダイは尊敬の眼差しをコチラに向けてくる。やめて！そんなに純粋な目を向けないで！オレのライフルはとっくにゼロよー

「ま、まあ…

それはオレの中の一^度だ

…いや、想像力というかなんといつか…」

「チユーネ？想像？どつこう事？」

「そんな言葉、聞いた事ねーぞ」

ヤバつ！

声に出てた！？

えつと、どう言おうか…。

まさか中一病の説明をする訳にもいかなしな。そして苦し紛れに出た言葉は。

17

そ？

想像するのは常に最強の自分

ゴメンナサイ赤い弓兵さん。

オレはあなたの言葉を汚してしまいました。

「なんか良いね。それ……

そういうふうに先生も言つてたつけ?

魔法はインスピレーションだった

ダイは気を取り直して標的である人形に手をかざした。ポップも思うところがあるように頷いている。

火球呪文！

見事に火球が出現する。

しかし飛んでいく気配がない。

「へへ、じつはたら…でござあああああああ…」

ダイは火球を殴り飛ばした。

火球はオレの手本と同じように人形を灰に変えた。ダイが無理やり打ち出したからだろう。

マジで怖い。

ダイは嬉しそうに「チラを見ると、飛び上がって喜んだ。

「や、やったー！」

初めて自分の意志で魔法を成功させたぞーーー！」

「つむ、見事じゃ

「けど、なんつう力技だよ…

あんなの成功した内に入らねーよ」

「まあ良いじゃないか。

あんなに喜んでるんだ。水を差すのもな…」

「確かにな…」

ダイは未だに飛び跳ねて喜んでいる。

オレも初めて呪文を使った時はあんな風に喜んだな。

それはもう厨一全開だつた…。

この際だ、次いでに真空系呪文も教えてみるか。
オレは飛び跳ねているダイの所へ歩き出した。

さいだいHP : 89
さいだいMP : 546

ちから : 42
すばやさ : 100
たのりよく : 45
かしこさ : 275
うんのよさ : 256

攻撃力 : 115
防御力 : 107

どうぐ

E : ガンブレード
E : ビロードマント
E : 力の盾・改
E : 幸せの帽子
E : スーパーリング
E : 星降る腕輪
E : 魔法の弾×10

呪文・特技

錬金釜 採取 大声 口笛
寝る 忍び足 穴掘り 大防御

ホイミ ベホイミ
キアリー キアリク シャナク

メラ メラミ メラゾーマ
ギラ ベギラマ
イオ イオラ
ヒヤド ヒヤダルコ ヒヤダイン
バギ バギマ
フバー ハ
ラナリオン
トランナ レミーラ

本日の新商品『鉄の剣』（後書き）

中一病が発症したタケルでした。

ダイの大冒険で中一病が誤解されてる…。

チュー二＝魔法を使う為の優れた集中法？

ダイ君、ポップ騙されるな。

本田の田中極品『鉄の魔術』（前書き）

「ワンキング見て驚きました。

日間、週間、月間トップ！

読んでくれた沢山の読者様に感謝です！

ありがとうございます。

本田の魔術商品『鉄の魔術師』

「明日、村を出るへ。」

「アリヤ、また急な事だな」

田も暮れ魔法の修行が終わり、俺達は明日に備えて休む事にした。ミーナの家を宿として使わせてもらひ。食事も終わり床に付いたところ、突然、ダイが村を出ると叫び出した。

「うそ、あまり長いできないから」

「ロモスに行くんだよな？」

「何をしにいくのか聞いても良いいか？」

「王様を助けに行くんだー！ 怪物モンスターに苦しまれながら

「……アハ」

急な事にマタムは田を丸くしている。

そして寂しそうな顔をすると田を伏せて部屋を出でこつた。

「わいと」

「あれ？ ビー行くの？」

「わよつと夜風に当たつにな」

オレは外に出ると先程までダイが特訓をしていた場所に来た。

寝る前にオレ自身の魔法の特訓をしようと思ったからだ。

これから戦い、介入する気はないが巻き込まれる可能性がある。

その時、自分の身を守る力は絶対に必要だ。

しかし強力な攻撃魔法を習得してしまえば、ポップの役目を奪いかねない。

なら小手先の技術を高めれば……。

オレは両掌にそれぞれ異なる呪文の構成を試みてみた。

しかし……。

「……ちつ……失敗か……

やつぱりそう簡単な技術じゃないんだな」

思つよつに集中できずに魔力は霧散してしまつ。

一つ同時に呪文行使、どうやらかなりの高等技術の様だ。

「だからといって諦める気はないけど……」

オレは気を取り直して両掌に魔法力を集中させた。

もしも成功すれば戦術の幅が広がる。

そしてあの魔法も出来るかもしねれない。

マジで夢が広がる！

「……おつと、雑念は捨てないとな

オレは気を取り直して両手に魔力を集中した。

「……無理」

約1時間後。

オレは両手の魔力を霧散させて呟いた。
はつきり言つて難しそう。

なんだよこれ！

ポップとマトリーフの師弟コンビ、マジでチートだよ。
左右で異なる絵を描くよりも難しいわ！
こんなの一朝一夕では無理だ。

最終決戦でぶつつけ本番で成功させたポップに尊敬。

「今日は無理だな。

要練習だなこりや…

気を取り直して鍊金でもするか」

オレはステ画面を開くと鍊金釜を選択した。
目の前に鍊金釜が出現する。

このゲーム仕様のお陰でオレは道具を盗まれた事が無い。
全くチートなスキルだよ。

オレは持っている全ての薬草と毒消し草を素材として使い、一段階
上の回復アイテムを作り出していく。

やっぱり何でもコツコツやるのが一番だ。

そして作業が終わり、心地よい眠気を感じる。

オレは明日に備えて床に就いた。

「もう朝か…」

窓の外を見た。

東の山からは日が顔を覗かせていた。

視線を下げるに村の入口が見え、そこには人集まりが出来ていた。

ダイとポップの見送りか。

俺も一緒に行こうかな。

魔の森を一人で抜けるよりもダイ達と一緒にほうが安全だ。

「…いや」

俺は直ぐに考えなおした。

明日の朝にはクロコダイルが百獣魔団を率いてロモスを襲つ筈だ。
そうなれば魔の森の怪物もかなり少なくなるだろ？
村を出るならその時の方が良いかも知れない。
でも…。

「流石にナイフと布の服は…」

明後日にはダイはクロコダイルと戦わなければならぬ。
しかも防具は無しナイフ一本…。
どんな罰ゲームだよ！
難易度HardどころかVery Hardだよ！

「少しくらいなら、手助けしても良いよな…」

オレは直ぐに起きると、ダイ達の所に急いだ。

「ダイ兄ちゃん…

怪物をやつけたら、絶対にまた来てね！」

「頑張るんじゃぞ」

「気をつけてな」

「マア、ムもありがとう。」

「「あんね、本当はつこに行つてあげたいけど」

「大丈夫さーちゃんと地図をもらつたしねー。」

「ダイ、ポップ！」

「タケルも見送りに来てくれたの？」

ダイ達に駆け寄ると、ダイは嬉しそうにオレの顔を見上げた。
だからそんな顔で見ないで欲しい。

伝説級の武具を上げてくる。

オレは尤もらしく咳を一つ、道具袋からあるものを取り出した。

「それもあるが、ダイに受け取つてほしい物がある」

「え、何を…」

オレは道具袋から鉄の剣と鉄の胸当てを取り出した。

「え、えええつーー？」

剣と胸当てを見て、ダイは目を白黒させて驚いた。

「ダイ、装備してやるから『シチに来い』

ようす屋がサービスでお客さんに装備させてあげるのは『ツフオだ。オレの『一テイナー』に驚くが良』！」

「も、貰えないよー。オレ、お金なんて無いしー。

そう言いながらもダイはチラチラと鉄の剣を見ている。本当は欲しいくせに無理しやがって。

オレはダイの肩に手を出した。

「ダイ、呑く聞いてくれ」

「う、うん……」

「きのう現れたあの怪物…
恐らく近い内にダイのところに現れるはずだ」

オレの言葉にダイは真剣な表情で頷く。

「敵は独りじゃない。

百獣魔団とかいうのも居る…

『ぐらお前が強くてもナイフ一本で勝てる程、連中は甘くない』

「や、それは…」

オレは更に畳み掛ける。

「昨日の戦い…」

「え？」

「正直言つて凄かつた…

オレ、メチャ怖くて死ぬかと思つたんだ…
でもさ…

ダイが戦つてるとこを見て、何ていつのかな…」

ダイ達は黙つてオレの話を聞いている。

「子供だけど、とてもそつは見えないつていうか
うん、本当にダイが勇者に見えたんだよ…」

「オレが勇者？」

ダイは目を丸くして驚く。

オレはダイの言葉に「ああ」と答えて剣を差し出した。

「オレは商人だ…

魔法はそれなりに使える。

けど実際に戦いの術を学んだわけじゃない…

オレにはダイの様に魔王軍と戦う事は出来無い。
だから…。

オレはお前に賭けてみよつと思つ

「タケル…」

「俺の代わりにその装備を連れていってくれないか?
さつきも言つたけど、クロコダイン相手にナイフ一本は無理だ」

唯でさえクロコダインの方が力量レベルが上なんだ。

しかも真空の斧と「ツイ鎧まで装備している。

その上ザボエラまで絡んで来るのだ。

Very Hardとか思つたけど、難易度はそれ以上かもしれない。

オレは真剣な表情でダイの顔を見つめた。

ダイは理解し力強く頷いた。

「ありがとう、タケル！

オレ、絶対にロモスの王様を助けるよ！」

「頼んだぞ」

オレは早速ダイに鉄の胸当てと鉄の剣を装備させてやつた。

布の服の上で光る銀色の防具。

腰に差された鉄の剣。

こうして見ると一端の戦士に見える。
かなり見違えた。

「どう、どうかな？」

ダイは照れくさそうに言った。

「よく似合つてるだ

どうせクロコダインを倒せば鋼の剣を貰えるんだ。

鉄の剣くらいなら問題ないだろ？

切れ味ならパプニカのナイフの方が上かもしけないし。

「な、なあ！ オレには？」

「臆病が治ればくれてやるよ」

「なんだよ！ それ！」

- おはせ! -

すまんポップ！
本気でゴメン！

ケーラー、タイン戦が終われば良い装備を上げるから許してくわー！

「やるよ」を「やる」に置き換える

—なんだよ、アラモ?

「俺特性、特やくそうだ！」

「失礼な。

あれ？ 言つたつける？

「聞いてねーよ！

まあ、先生も褒めてたから効果は良いみたいだけど
ていつか金は取らないのかよ！？

「今は非常時だ。

皆の為に戦ってくれてる勇者から金は取れないよ。

俺が金を取る相手は持つて居る相手だけだ！」

決まった！

本当はそうでも無いんだけどな……。

周りを見ると皆が感心したようだ俺を見ている。照れるじゃないか……。

「…………んんっ！」

「じゃあなーダイ、ポップ！」

「一人とも絶対に死ぬんじやないぞー！」

「うんー、じゃあもう行くよー！」

「元気でな！」

ダイとポップは別れを惜しみながら手を振り、森の中に消えていった。

「本当に大した奴らだな……」

「全くじゃ……

「あんなに小さこのに魔王軍と戦おうとは……」

「ママム？」

ふとママムを見ると、彼女は泣いていた。

既に見えなくなつた一人の後ろ姿。

彼らが消えた森を見ながら涙を流していた。

母レイラがママムの肩にそつと手を置いた。

「行ってあげなさい」

「お母さん……」

「私達のことは構わぬ」

レイラはママに武器を渡しながら微笑む。

「私もね……むかし

傷つきながらも戦い続けたアバン様とお父さん……
一人を見かねて村を飛び出したのよ」

「お母さん……」

「私の娘だもの、しょうがないわよ」

「わうだよ……」

「こつてきなよ……」

村の人たちも口々に声を上げた。

「村のことなら心配ないぞ

タケル殿が格安で武具を貸してくれたのでな

「タケルが?」

「まあな……

それよりもママ……

ダイ達にはお前が必要だ……」

俺はダイと同じ鉄の胸当てをママムに手渡した。

「ダイ達を頼む……」

ママムは力強く頷くと魔の森に向かつて走りだした。

「ママムにまで……ありがとうタケルさん」

ママムが入った後、レイラさんに感謝された。
いつもみるとマジで美人だな。

「いえ、良いんですよ。

俺には「レベラ」しか出来ませんから……」

ふう、これでダイ達と別行動が出来るな。
心配だけど自分の命と天秤に掛ければ自分の命に傾く。
肩の荷が降りた。

昨日、ダイ達がいたとはい、クロコダイン戦で懲りた。
アレは怖すぎる。

もしクロコダインが退いてくれなかつたらと思つビンツとする。
暫くほのぼのが續けば良いな

本日のタケルのステータス

レベル15

さいだいHP : 89

さいだいMP : 546

ちから : 42

すばやさ : 100

たいりょく : 45

かしこさ : 275

うんのよさ : 256

攻撃力 : 115

防御力 : 107

どうぐ

E : ガンブレード

E : ビロードマント

E : 力の盾・改

E : 幸せの帽子

E : スーパーリング

E : 星降る腕輪

E : 魔法の弾 × 10

呪文・特技

錬金釜 採取 大声 口笛

寝る 忍び足 穴掘り 大防御

ホイミ ベホイミ
キアリー キアリク シャナク
メラ メラミ メラゾーマ
ギラ ベギラ
イオ イオラ
ヒヤド ヒヤダルコ ヒヤダイン
バギ バギマ
フバー ハ
ラナリオン
ト ラマナ レミーラ

本日の廻舟商品『鉄の胸当て』（後書き）

タケルは布の服＝防具ではないと感つてこます。
唯の普段着です。
今日は少し短めです。

本田の『黒魔晄』『身かわしの服』（前編）

原作に絡ませると少しふくくなりますね。
しかし好きなシーンなので入れてみました。

本日の皿山商品『身かわしの服』

ダイ達が口モスに向けて出発した後。
オレは一人、頭を悩ませていた。

次の目的地はベンガーナ。

恐らく現時点では最も安全な国だ。
ベンガーナの誇る戦車は実際に、何度も魔王軍の侵攻を防いでいる。
初めて戦車を見た時は感動したものだ。

「はあ……」

オレは大きく溜息を付いた。
やつぱりダイ達が気になる。

心配してゐわけじゃない。

何せダイは主人公。

それに竜の紋章まであるのだ。
どんなにピンチに陥つても勝てる要素はあるのだ。

「心配?」

ふと横から声がかかつた。
レイラさんだ。

何時の間にかオレの隣にいた。

「ダイ君達の身を案じてゐるのじょう?」

そりや勘違いだ…。

最近良く勘違いされてるなオレ…。

ここは一つ誤解を解いておかないとな。

「いえ、ダイ達なら大丈夫だと思います。
それに心配してるわけじゃないですよ。
それよりもこれから先の事です」

「これから先の事？」

「はい、次はベンガーナにでも行こうと思つて…
あの国には戦車もあります。
魔王軍もそう簡単には攻められないでしょ？」

オレの言葉にレイラさんは目を開く。
そしてクスクスと笑つた。

「え？ と… オレ、可笑しい」と言いましたか？」

「ええ、何だかんだ言つても
あなたはダイ君達の身を案じている
だつてそうでしょ？
そうやつて理由をつけて
あなたは口モスに行こうとしているんですもの」

何を言つてるんですか奥さん…。
自分勝手に自己解釈しないで下さー。

「だつてベンガーナに行くにしても
口モスから船に乗る必要があるでしょ？
お見通しよ…」

レイラさんの言葉にオレは固まつた。

そうだった…。

ルーラの出来無いオレには徒歩か船しか移動手段はない。キメラの翼は最後に立ち寄った町や村に限定されている。レイラさんは二コ二コとした顔で俺を見ている。やばい、物凄くやばい展開。

もしかして期待しますか？

しない商人の俺に期待しますか奥さん？

それに皆さんもそんなに期待に満ちた目で見ないでくれ。

「商人の兄ちゃん、マアム姉ちゃんを助けてくれるの？」

「頑張つて！」

「まだ若いのに大したもんじや」

何この展開。

もしかしてオレ、口モス行き確定！？

レイラさんを見る。相変わらず二コ二コ。

村の皆を見る。期待に満ちた眼差し。

断れる雰囲気じゃない。

「……い、いや」

レイラさん流石！バレてました？
…適わないな～

冷や汗ダラダラなオレ。

何でこんな事になつたんだろ？

確かにベンガーナに行くには口モスから船に乗らなきゃいけない。

行くしかないのか？

でもつて戦いに巻き込まれるのか？

いや諦めるの早い。

今からゆっくり行けばもしかしたらクロ「ダイン戦が終わつた後に着くかもしれない。そうなればオレはこのままベンガーナに行けば良い。

そつと決まれば…。

「じゃあやるそろ行きます。

監さん、お元氣で」

「氣をつかむのじゃぞ」

「マムの事、よひしへお願ひします」

「つしてオレはロモスへと旅立つた。

「ゆく行け…

なるべくゆくじと…

一晩ぐらい野宿しても良いかも…」

ロモスの城下町。

魔の森を抜けたオレは門を抜けて街に入った。

「きやああああ

「た、助けてくれーっ！」

周りからは悲鳴と獣の吠え声が響いてくる。

それだけじゃない。

ゴオオオオオオツ！…！

街からは火の手が上がり、ガラガラと建物が崩れる音も聞こえてきた。

火炎系呪文か閃熱呪文か、魔物が使ったのだろう。

「なんでこうなる」

オレは城門の影に身を隠して街の様子を伺っている。
実はもつと遅くに…。

少なくとも事が終わつた後口モスに到着する予定だった。
けど無理だつた。

魔の森で野宿が。

そんな度胸、ヘタレたオレには無理だつたのですよ！

凶暴な怪物が徘徊してゐる森で一人眠るなんて出来るか！
誰だよ！魔物の数が減つてるなんて言つたのは！

お陰で無理やりの強行軍。

超スピードで口モスを目指して疾走した。

星降る腕輪の力もあつて日が登る頃には口モスに到着した。

「嗚呼、逃げようが立ち向かおうが危険じゃん

兎に角、口モス城にだけは行かない方が良いな。
天秤に掛ければ逃げた方がまだ安全だしな。
にしてもモンスター怖い…。

このまま立ち止まつてゐるのは流石に不味い。
オレは聖水を自分にふりかけると、教会へと走りだした。

タケルが口モスに到着する少し前
ダイ達は怪物達の大きな咆哮で目を覚ました。
窓を開けると既に怪物は城下町に侵入しており、町は阿鼻叫喚だつ
た。

既に人々に犠牲も出でている。

「そ、総攻撃をかけてきやがつた…」

ポップは身を竦ませている。

「お、おーーありや 一体なんなんだ！」

隣の部屋にいた偽勇者が泡くつて飛び込んできた。

「百獸魔団が来たんだ！」

「そ、そんな！

今までこんな大軍で魔物が襲つてきた事なんて！」

『グオオオオオツ！…』

今度は空から猛獸の雄叫びが響く。

クロコダインだ。

ヘルコンドルの力を借りて空を飛んでいる。

そしてそれに付き従うように鳥系の魔物が後に続いている。

「行け！行けいっ！！

口モス城を殲滅するのだあつ……！」

怒りに燃えるその形相に面々は冷や汗をかいだ。
偽勇者の一行は、全身を震えさせて怯えている。

「城へ向かつてゐる？」

ママムの眩きにダイはキッと歯を噛んだ。
ダイは装備を身につけると部屋を飛び出していった。

「早く後を追わないと！」

ママムは急いで身支度を整える。
そして壁に立て掛けたハンマースピアを取つた。

「さあ行くわよ！」

「え、ええー？ 何でだよー？」

ポップはママムの言葉に難色を示した。

「先刻のクロコダイルの目を見なかつたのー？
あいつはダイを殺す事しか頭に無いわ！
今すぐ助けに行かなきやー！」

「俺たちも、ゴメンだからなー！」

「そりよーなんたつて命が一番大事だしね

「ハハ、俺も賛成ー！」

偽勇者達の意見にポップは賛成を表明。
その言葉にマアムは怒った。

ポップの胸ぐらを掴んで引き寄せて叫ぶ。

「何ふざけんのよー? 早く… つー」

「だけどよ、ヤツは半端じゃなく強いんだが? 行つても殺されるだけだつて…」

「だから私達が助けに行くんでしょ! ? 早くしないとダイが殺されちゃう… 3人で力を合わせなきや! ! !」

「心配ねえつて… いざとなりやダイはめつぽつ強いし… 死にゃしねえよ」

「… ポップ?」

マアムは信じられないといった顔でポップを見る。
ポップはバツが悪そうに目を逸らすだけ。
一人の間に重い空気が流れれる。
号を煮やしたマアムはポップを揺すつて叫ぶ。

「あなた、ダイの友達じゃないの! ? 仲間じゃなかつたの? ! ? どうしたのよー?」

「うつせえな!」

オレは初めから魔王軍と戦う気は無かつたんだ！
好きで戦つていた訳じやないんだよ！」

ポップは肩を震わせて叫んだ・

「そりやアイツとは一緒に修行した仲だ
けどよ…
あ、あいつがいるから次々と敵が襲つてくるんだぜ？
巻き添えくつて死にたかねえっ！」

「…つ…」

次の瞬間、ポップは吹き飛んでいた。
ママムが力の限りポップをぶん殴つたのだ。
ポップは壁を突き破つて倒れた。
すぐに身を起こしてママムを睨みつける。

「…て、てめえつ！」

しかし言葉が続かなかつた。
ママムが泣いていたのだ。

その表情は失望と落胆、そして深い悲しみ。

「あなた、アバン先生から何を学んだの？
ダイのあなたも先生の敵を討つために…
命がけで戦つている…
そう思つたからこそ私、ついてきたのに…
仲間になつたのに…」

「ママム…」

「最低よ！」

あんたの顔なんて一度と見たくない！」

マアムは背を向けて走りだした。

なんとか怪物をやり過ごしながらオレは教会へと目指していた。

逃げ切れない怪物を攻撃呪文で倒しオレは走る。

十字架の付いた三角の屋根が見える。

教会に間違いない。

非常時なら教会に住人が避難しているはず。

薬草を持つていけばウハウハだ！

命が掛かっているんだ。かなり売れるに違いない！

「…ん？」

あれは、マアムか？」

目に涙をためたマアムが走っていくのが見える。

向かう先には城がある。

どうやらポップと別れてダイを助けに行くみたいだ。

「…気になる」

ポップが勇気を振り絞って立ち上がるシーン。

メチャクチャ気になる…。

でも前も好奇心に負けて死にそうな目に合つたんだよな。
しかし今回は迷わず様子を見に行く！

何せダイの大冒険で一番好きなキャラを聞かれれば迷いなくポップと答えてしまうオレ！

それにクロコダイルの所に行く訳じゃないし…。
ちょっとだけなら…。

気がつけばオレはママムが来た方角に向かっていた。
少し行くと『エーネ』の看板が見える。
あそこにポップが居る筈だ。

ママムがダイの後を追つて少し。

ポップは葛藤の渦にいた。

怪物が怖い。自分なんかが適うわけがない。

痛いのも怖いのも嫌だ。

死にたくない。

でも…。

本当はダイ達を助けに行きたい…。

「…いや、関係ない！関係ねえさ！

あいつらが死のうとオレの知ったこいつちやねえつー

そうだよ。

それにオレなんかが行つても意味はない。

クロコダイルに殺されるだけだ。

最終的にはそう完結してしまつ。

ポップはそんな自分が堪らなく嫌だった。

「おじやまするよ」

「だれだ？」

現れたのは魔法使いの老人だった。

「たしか、偽勇者の…」

「ホツホツホ」

魔法使いの男は怪しそうな笑みを浮かべると、部屋に備え付けられている椅子に腰を下ろした。

「あなたは逃げねえのか？」

「あい」「ぐと皆が逃げてからがワシの仕事での」

魔法使いはローブに隠してある金品をテーブルに置いた。

「廃品回収と言つわけじゃな…」

「何を言つてやがんだ！」

そういうのを火事場ドロボーって言つんだー！」

「どうじゅ？

お前さん、ワシの仲間にならんか？
見たところ見所がありそうじゅ…」

「冗談じゅねえ！

いいか？

オレはかつて魔王を倒した勇者アバンの弟子だ！
てめえら小悪党と一緒にするな！」

ポップはアバンの印を取り出して叫んだ。

「ほほり…

ワシには全く変わらんように見えるが?」

「何だと…?」

「仲間を見捨てるような者に務まるかの?
あの有名なアバンの使徒といつのは…?」

ポップは痛いところを突かれ口籠つた。
全くもつてその通りだからだ。
ポップ自身、既に自覚している。
だが踏み出す勇気がないのだ。

「どれ…

お前の仲間がどうなつてているのか
ワシが水晶玉で見てやるとするか…」

魔法使いは取り出した水晶玉に魔力を込めた。
水晶玉が光を放ち、望みの風景を映し出す。

「ああ…!?

映しだされたのは倒れたダイを見下ろすクロコダインだった。

鬼面道士プラスも居る。

ダイに取つては手を出せない育ての親だ。

デルムリン島の結界の外に出た為ダイの敵に回ってしまったのだろう。

「マアムは悪魔の田玉に捉えられて身動きが取れない状態だ。
まさに絶体絶命だ。

ポップは水晶玉に縋り付いて涙を流した。

何とかしてやりたい！助けたい！

「ちくしょう…っ！」

「勇者とは勇氣ある者つ！…！」

いきなりの言葉にポップは顔を上げた。
いつもは悪人顔の魔法使いの真剣な表情。
思わずポップは聞き入つてしまつ。
男は立ち上がつて叫んだ。

「真の勇氣とは打算なきもの！
相手の強さによつて出したり引っ込めたりするのは
本当の勇氣ではないつ…！」

男の言葉にポップは肩を震わせた。
それは自分自身だったからに他ならない。
打算に満ちた自身の行動…。
男はフツと笑うと再び腰を下ろした。

「なんてな…

ワシの台詞じやないぞ

ワシの師匠がいつも言つていた言葉じや」

「…師匠？」

「ワシもな…

若い頃は正義の魔法使いになりたくて修行しとつたんじやよ…

けど駄目だった

自分よりも強い奴が相手だと
どうしても踏ん張れなくてのう…
仲間を見捨てて逃げるなんてザラじやつた
おかげで今はこのザマジや

「じいさん」

「お前さんを見ると昔の自分と重なつての
放つておけん気になつてしまつてな…
ちと、おせつかいをしたんじやよ」

男はポップの胸に手をおいて言った。

「ああ早く行け
胸に勇気の欠片が一粒でも残つてゐるしね…
小悪党にやなりたくないだろ?」

それはポップの望んでいた最後の一押しだつた。
魔法使いの男はポップの背中を押したのだ。
ポップは目に強い決意を宿していた。
もう迷いはなかつた。

ポップは部屋を飛び出した。

「ポップ！」

「あ、おめえは、タケルじやねえか!?」

宿屋から飛び出したポップに声を掛けたのはタケルだった。

オレが宿屋の前に来ると血相を変えたポップが飛び出してきた。
そうか、これからクロコダイルと戦いに行くのか。

凄い勇気だな。

さすが魂の力『勇気』の人だけの事はある。
オレにはとても真似出来無い。
けど少しの手助けくらいは許されるだろう。
オレはポップに声を掛けた。

「ポップ！」

「あ、おめえは、タケルじゃねえか！？」

「行くのか？クロコダイルの所に」

「…ああ」

強い日だ。

今のポップになら武具を渡しても良い。
オレはポップに用意しておいた防具を手渡した。

「…」、「…」、「…」、「…」、「身かわしの服」じゃねえか！？

「急いで着ろ！

時間がないんだろ？」

ポップが驚くのも無理は無い。

身かわしの服は高級品だ。

動きやすい様に作られており敵の攻撃を避けやすい。
しかも鉄の鎧よりも丈夫なのだ。
非力な魔法使いにとつては心強い防具なのだ。

「けどよ…」

「オレに出来るのはここまでだ

出来ればオレも一緒に行つてやりたいが…」

オレは教会の方を見る。

向こうからは人の悲痛な泣き声が聞こえてくる。
ポップの表情が歪む。

「オレはオレに出来る事をしようと思つ」

これは本音だ。

オレは大量の回復アイテムを持っている。

今は役立てる時だ。

「ダイとマムを助けるんだろ?」

オレの言葉にポップは力強く頷いた。

ポップは着ている服を脱ぎ捨てると走りだした。
どうやら走りながら身かわしの服を着る気の様だ。

「やれやれ、たつた一日で変わるもんだな
アレが本物つてやつなんだろ?」

上半身裸で身かわしの服を脇に抱えて走るポップ。
その後ろ姿を見ながらオレは溜息を付いた。

「頑張れよ…ポップ

オレ、お前の大ファンなんだからな…」

勿論、ダイよりも…。

こんな事、とても本人には言えないよな。
オレはポップに言った言葉を実行する為に走りだした。

本日のタケルのステータス

レベル16

さいだいHP：95

さいだいMP：550

ちから：45

すばやさ：110
たいりょく：47
かしこさ：275
うんのよさ：256

攻撃力：118
防御力：112

どづぐ

E：ガンブレード
E：ビロードマント
E：力の盾・改
E：幸せの帽子
E：スーパーリング
E：星降る腕輪
E：魔法の弾×10

呪文・特技

鍊金釜 採取 大声 口笛

寝る 忍び足 穴掘り 大防御

ホイミ ベホイミ
キアリー キアリク シャナク
メラ メラミ メラゾーマ
ギラ ベギラマ
イオ イオラ
ヒヤド ヒヤダルコ ヒヤダイン
バギ バギマ

フバー
ラナリオン
トランナ
インパス
レミーラ

本日の新商品『身かわしの服』（後書き）

タケルにBL趣向はありません。

純粋にポップのファンなだけです。

身かわしの服はやり過ぎでしょうか？

クロコダイル戦の後、確か旅人の服を貰えた筈…。
鉄の鎧よりも丈夫で回避率HPな装備…やり過ぎかな…

実は迷いました。

『身かわしの服』か『くじけぬ心』か…。

でも『くじけぬ心』はポップよりもタケルにこそ必要なものかなと
…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2165z/>

ダイの大冒険でよろず屋を営んでいます

2011年12月16日21時28分発行